つくしがんばる！

銀の鈴

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ストリートファイターの世界で平凡だった彼がファイトに目覚めていたら？

神月かりんを師匠として、その牙を研ぐ若き狼

今、最強伝説の幕が上がる――かも知れない。

目次

プロローグ ―― 1
第一話「つくしのタイプ」 ―― 5
第二話「つくしと必殺技」 ―― 10
第三話「つくしの初陣」 ―― 14
第四話「特別な庶民」 ―― 18
第五話「師弟と姉弟」 ―― 22
第六話「ヨーロッパへ」 ―― 27
第七話「赤きサイクロン」 ―― 34
第八話「英雄の言葉」 ―― 44
第九話「弟の戦い」 ―― 49
第十話「つくしの成長」 ―― 55
第十一話「兵士の想い」 ―― 67
第十二話「つくしの選択」 ―― 72
第十三話「男の意地」 ―― 78

プロローグ

僕は、春日野つくし１２歳。
ごく普通の小学６年生だ。
もっとも、あることをのぞけばだけどね。
そう、僕はストリートファイターを目指している。
「よしっ、今日も特訓だ！」
今朝も僕は学生服に着替えると、早朝修行のために階段を降りて玄関に向かう。そしてその途中で姉ちゃんと出くわした。
「おはよう、つくし。今日も早いね」
「姉ちゃんこそ毎朝早いよね」
僕の姉ちゃんは、僕と同じくストリートファイターを目指している。だけどそれは僕達二人だけの秘密だった。
ストリートファイターを目指しているなんてことが親にバレたら余計な心配をかけてしまうからね。
「つくしも特訓に行くなら、あたしと行こうよ」
姉ちゃんは、よく僕を自分の特訓に誘ってくれる。でも僕は毎回その誘いを断っている。
「ごめん、姉ちゃん。誘ってくれて嬉しいけど、僕は自分のペースでやりたいから」
「やっぱりダメかぁ、残念だけど仕方ないよね」
僕の答えに姉ちゃんは寂しそうな顔になるけど、僕は心を鬼にして姉ちゃんと別れる。
「それじゃ、僕は先に行くね」
「うん、頑張ってね！」
僕の言葉に姉ちゃんは、寂しそうな顔から元気いっぱいな顔に変えて僕を送り出してくれた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ジョギングをしながら僕は、姉ちゃんのことを考えていた。
「本当は姉ちゃんと特訓したいんだけどなぁ」
一人で特訓をするより二人で特訓をした方が当然効率がいいけど、

僕には姉ちゃんに秘密にしている事があるから一緒に特訓が出来なかった。
　僕の秘密。
　それは…
「つくし、遅いですわよ。わたくしを待たせるだなんて１００万年早いですわ」
　鋭い目付きをした彼女は、金髪ロールを風になびかせながら僕を出迎えてくれた。
「ごめん、かりんさん。出掛けにちょっとあってね」
「ふうん。さしずめさくらさんにちょっかいをかけられた、という所かしら?」
　彼女の名前は『神月かりん』大財閥のお嬢様にして、数多の武術をマスターした武術家でもある。
　そして、僕の姉ちゃんのライバルでもあった。
「流石はかりんさん。僕の行動はお見通しみたいだね」
「うふふ、つくしは我がライバルであるさくらさんの弟にして、わたくしの愛弟子でもあるのですよ。そのぐらい予測出来ましてよ」
　かりんさんは機嫌よく答えてくれた。
　僕の秘密…
　それは姉ちゃんのライバルであるかりんさんが、僕の師匠だという事だった。
――――――――――――――――
　彼女との出会いは突然だった。
　それは、急ブレーキの音と共に始まった。
　黒塗りの高級車は、急ブレーキを響かせながら僕の目の前で横転した。
　そしてその後を追いかけるように装甲車が突っ込んできた。
「はぁあああああっ!!」
　横転した高級車の扉を吹き飛ばしながら中から現れたのが、彼女だった。
「ウフフ、このわたくしを狙うとは随分と死に急ぐ方達ですわね」

言葉は丁寧だったけど、その身から放つ殺気は隠しようもなく苛烈なものだった。
装甲車から降りてきた男達は覆面をしていたけど、彼女の殺気に少なからず気圧されたように感じた。
「…怪我をしたくなければ大人しく我々に従ってもらおう」
男達は気を取り直すように頭を振ると、彼女に脅すような言葉をかける。
「わたくしに対してその様な言葉を発した勇気は評価しましょう」
彼女は覆面の男達に不用心に近付いていく。
「けれどその勇気が蛮勇だということを…」
「危ないっ!!」
不用心に近付く彼女に男達が襲いかかる仕草をみせた瞬間、僕は男達に飛びかかっていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

僕は傷付きながらも男達を制圧した…と言いたい所だけど、あっさりと一撃で吹っ飛ばされた所を逆に彼女に助けられた。
「はぁ、全く余計な事をしてくれましたわね」
彼女は呆れたように溜め息をつきながらも、僕を介抱してくれる。
「実力差も分からずに突っ込むのは勇気ではありませんわよ」
「これも蛮勇ってヤツかな?」
僕は彼女が先ほど口にした言葉を思い出しながら言った。
「…そうですわ。と言いたい所ですが、わたくしより年下の君が、身を挺して助けようとしてくれたことには感謝すべきですね」
彼女は僕を膝枕しながら優しく頭を撫でてくれた。
「うーん。これでもストリートファイターを目指して特訓をしているのに自信なくすなぁ」
複数の大人相手に勝てるだなんて思っていなかったけど、時間稼ぎすら出来なかったのはショックだった。
「ストリートファイター?君はストリートファイターを目指しているのかしら?」
彼女は僕の頭を撫で続けながら聞き返してくる。

「うんそうだよ。僕はストリートファイターになるんだ！」
まるで姉ちゃんに膝枕されてるような錯覚を覚えながら、僕は彼女に自分の夢を熱く語る。
大きくなったらストリートファイターになって、実力を磨いたらプロの世界で力を試したいこと。
世界中を巡って、まだ見ぬ強敵達と腕を競い合いたいこと。
僕は覆面をした男達が倒れているど真ん中で、綺麗なお姉さんに膝枕をされているという非日常的な状況に当てられて、冷静じゃなかったんだと思う。
今まで姉ちゃんにしか言わなかった事を口にしていた。
そして、今まで姉ちゃんにすら言わなかった事を口にした。
「僕は強くなって、僕の大事な人を守るヒーローになりたいんだ！」
自分のことながら子供っぽい夢を語る僕の事を、彼女は呆れもせずに優しい眼差しのまま聞いてくれていた。
「そう、君には大きな夢があるのね。でも、その夢を叶えるにはもの凄い努力が必要ですわよ」
彼女の言葉に僕は応える。
「勿論だよっ！僕の夢が簡単に叶うだなんて思ってないよ。こう見えても毎日特訓しているんだからね！」
「うふふ、そうね。君の身体は年齢のわりに鍛えられている。その努力がわたくしには伝わってきますわ」
彼女は優しく笑いながら、僕に提案してきた。
「そうだわ。今回のお礼にわたくしが君に武術を教えて差し上げますわ」
何故か、提案ではなく決定事項だったけど、彼女の実力は目の当たりにしたばかりだから異存はなかった。
「そういえば、わたくしの名前を言っていなかったですわね。わたくしの名前は…」
これが僕と彼女ーー〝神月かりん〟との出会いだった。

第一話「つくしのタイプ」

早朝の河川敷で僕は空手の型を繰り返していた。もちろん師匠のかりんさんの指導を受けながらだ。

「もう少し腰を落としなさい。それと肩に力が入りすぎていますわよ」

かりんさんは僕の型を見ながら事細かく修正をしてくれる。

たまに姉ちゃんと特訓をするときは組手ばかりのせいか、なんだか新鮮に感じる。

「そうですわね。確かにさくらさんの場合は、組手重視の鍛錬方法が向いていると思いますわ」

僕が姉ちゃんとの特訓のことを話すと、かりんさんは丁寧に説明してくれた。

姉ちゃんの場合は、天性の運動能力と動物的勘を養うために実戦さながらの鍛錬の方が効率がいいそうだ。

何よりも姉ちゃんの格闘スタイルは既に確立されているから、後は磨いていくだけとのことだった。

「つくしの場合は、残念ながらさくらさん程の才能はありませんわ。強くなるためには基礎を養うことが必要不可欠です」

姉ちゃんと違い、僕には天性の才能はないらしい。これは別に格闘家として向いていないという意味ではなく、自分流ともいえる格闘スタイルを生み出す才能のことだ。

「つくしは、先ずはきちんとした型を身につけて、正しい動きを学ばなければなりません。さくらさんのように組手重視では悪い癖がついてしまい成長の妨げになりかねませんわ」

「でも、型を繰り返しただけで強くなれるんですか?」

「型を繰り返すいうことは、体を動かす訓練をしているという事ですわ。もちろん型だけでは勝負の機微を学ぶ事は出来ませんが、体を自分の思い通りに動かす事が出来るようになります。さらに段階が進めば頭で考える前に体が動くようになりますわ。今は強くなるための準備期間だと思いなさい」

かりんさんいわく、僕は姉ちゃんのような実戦の中で強くなっていくタイプではなく、地道に努力を積み上げていって強くなるタイプだそうだ。
「なんだか姉ちゃんのタイプの方が得だよね」
「うふふ、確かにさくらさんは戦えば戦うほどに強くなっていくのですから手に負えませんわね」
どうやらかりんさんも僕と同意見のようだった。だけどかりんさんは〝ですが〟と言葉を続ける。
「つくしは、わたくしと同じく積み上げて強くなるタイプですわよ。わたくしと同じでは御不満なのかしら？」
そう言って、イタズラっぽく笑うかりんさんへの返事は決まっていた。
「かりんさんと同じタイプなら嬉しいな。だって、かりんさんがすっごく強いことは誰よりも僕が知ってるもん」
このあと、急に上機嫌になったかりんさんに目が回るほど頭を撫でられた。

――――――――――――――――――――

かりんさんとの特訓を終えた僕は友達の家に向かった。今日は新しいゲームを借りる約束をしている。
そして何故かかりんさんも付いてきた。
「庶民の暮らしを観察するのも支配者としての嗜みですわ」
支配者って…かりんさんは時々、訳のわからないこと言うから反応に困る。
「えっと、かりんさんはテレビゲームとかするんですか？」
「テレビゲームは嗜んだ事はありませんわね」
「へぇ、今時珍しいよね。でも女の子ならそんなものなのかな、うちの姉ちゃんもテレビゲームは苦手だから」
「あら、さくらさんはテレビゲームが苦手なのですね。ウフフ、それは良い情報を聞きましたわ」
ニヤリと笑みを浮かべたかりんさんは、懐から携帯電話を取り出すと何処かに連絡をする。

「柴崎、急ぎ現在販売されているテレビゲームを全て用意しなさい」
かりんさんがとんでも無い事を言ってるけど、冗談だよね?
――――――――――――――――――
友達の山田くんの家は、けっこうデカい三階建てだった。両親揃って大企業に勤めてるとかで中々のお金持ちだ。
「おう、よく来たな。早く家にはい…誰だ、後ろの金髪ネーちゃんは?」
「この人は、僕の格闘技の師匠をしてくれてる神月かりんさんだよ。さっきまで特訓をしてて、そのまま付き合ってもらっているんだ」
この言い方だと僕が頼んで付いてきてもらってるみたいだけど、まさか勝手について来たなんて言えないよね。
「なんだぁ、それってお前ら付き合ってるって事か?」
「はぁっ!?何でそうなるんだよっ、かりんさんは凄い人なんだから変な事言わないでくれよ!」
山田くんの突然の発言に僕は焦ってしまう。もしもかりんさんが気分を害したりしたら、山田くんは一瞬でボロ雑巾のようにされてしまうだろう。
もっとも、かりんさんが小学生男子の軽口に本気で怒るとも思えないから、ありえるのは、この事をネタにして僕をからかう事だけど、こっちの方が僕は嫌だ。
「あらあら、つくしはわたくしをそういう対象として見ていらっしゃったのね。今まで気付かないでごめんなさいね」
嫌な予想通り、かりんさんはニヤニヤと嬉しそうに笑いながら僕をからかってくる。
「もしかして、わたくしを連れてきたのはお友達に見せびらかす為だったのかしら?うふふ、こうやって既成事実を積み重ねていく事でわたくしを手に入れようと画策しているのね」
いやいや、かりんさんは僕が連れて来たんじゃなくて勝手に付いて来たんだよね。そう言いたいところだけど、山田くんへの説明と食い違ってしまうから言えない。
「つくし…お前って、凄え奴だったんだなぁ」

山田くんは、僕達に（かりんさんが悪ノリして僕に腕を絡ませている）に驚愕の眼差しを向けながら呻くように呟いた。
「うふふ、わたくしと付き合うためには、もっと死に物狂いに努力をして下さらないとダメですわよ」
かりんさんの冗談に何故か寒気がしたけど、きっと気のせいだろう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

着流しの男は腰に差した刀に手を掛けたまま微動だにしない。
その男の正面に立つ男は野獣のような雰囲気を放つ男だった。
結果的には、対峙する二人の男達の決着は一瞬で決まる事になる。
最初は野獣の男が恐ろしい程の跳躍力で目の前の着流しの男に襲いかかった。
振りかざした手には武器は握られていなかったが、その代わりに人間とは思えないほどの鋭い爪が伸びていた。
それは人の身体など容易く切り裂けると一目で感じさせる。
だが、己を切り裂かんと迫り来る爪を前にしても着流しの男は動じなかった。
冷静に互いに間合いを見極め、絶妙のタイミングで抜刀すると野獣の男を斬り裂く。そしてその剣撃は一撃では終わらずに連続で繰り出されていく。
その隙のない連撃に野獣の男は全くなす術なく、体力の全てを奪われた。
〝ＹＯＵ　ＬＯＳＥ〟
僕の目の前の画面に無情に浮かぶ文字。
それは僕の敗北を意味していた。
そして、僕の傍らには勝利の微笑みを浮かべたかりんさんがいた。
「かりんさんゲームをするの初めてだよね!?どうして僕より強いの!!」
「つくしとそこの庶民の対戦を見て学びましたわ。案外と簡単ですわね」
「いやいや対戦を見たって言っても2、3回だけだし、実際にかりんさ

んが操作したのは初めてだったよね!?」
「我が家の家訓は『万事において常に勝利者であるべし』なのですよ。そのわたくしが遊戯とあろうとも、弟子であるつくしに負けるわけがありませんわ」
「まぁあああったく、ゲームと関係ない話だよねっ!?」
「うふふ、つくしは負けず嫌いですわね。負ける事によって初めて見えるものもあるのですよ。それをわたくしはさくらさん…つくしのお姉さんに教えてもらいました」
　そういえば、かりんさんは姉ちゃんに負けた事があるらしい。姉ちゃんは確かに強いけど、かりんさんが負ける場面は想像できない。まあ、姉ちゃんが負けるとこも想像できないけどね。でも、
「うがー!!テレビゲームで初心者に負けても悔しいだけだよっ!!」
「おーほほほ!そこに気がつくとは、つくしも成長したようで嬉しく思いますわ」
　かりんさんにいいようにからかわれる僕を見ていた山田くんが呟いた。
「つくしは尻にしかれるタイプだな」
　幸いなことに、かりんさんに弄られていた僕にその言葉は聞こえなかった。

第二話「つくしと必殺技」

　姉ちゃんの両手の間から光が溢れる。
「はぁあああああっ!!」
　離れて見ていた僕の肌を震わせるほどの気合いを発しながら、前方に押し出した姉ちゃんの両手から光の塊が放たれた。
　その幻想的な光景を見た僕の心に浮かんだこと。それは…
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「かりんさんっ、僕も必殺技を覚えたいです!」
「はぁ、さくらさんも困った事をしてくれましたね」
　姉ちゃんの必殺技を見せてもらった僕は、是非とも自分も覚えたくて、その場で姉ちゃんに教えてくれとねだった。だけど、
「ねえ、ねえ、かりんさん、僕に必殺技を教えてよ!姉ちゃんに聞いても『やるぞ!って気持ちを込めたらいいんだよ!』なんて訳のわかんない説明しかしてくれないんだよ!」
「それは、まあ、さくらさんらしいといえばらしいですわね」
　姉ちゃんの大雑把な説明にかりんさんも呆れたような顔になりながらも納得していた。
「かりんさんなら姉ちゃんの必殺技も教えられるんじゃないかと思ったんだ」
「うふふ、つくしはわたくしの事を随分と高く評価をして下さっているのね。でも、今までにわたくしがそのような技を使った事はありませんよね。何故、教えられると思うのかしら?」
「かりんさんは色々な武術を合わせて神月流格闘術を作ったんだよね。その中に姉ちゃんの必殺技もあると思うんだ。だって、姉ちゃんの必殺技はあの全米格闘王のケン・マスターズの技だよ。それをかりんさんが学んでないわけないよね!」
「なるほど、確かにその推測は正しいですわ。わたくしはケン・マスターズの技を随分と研究しましたわ」
　かりんさんの言葉に僕は興奮する。これで僕にもあの必殺技を使えるかもしれない。

「それなら僕にも教えてよ！」
「つくし、話は最後までお聞きなさい。わたくしは研究をしたと言ったのですよ。練習したとも身につけたとも言っておりませんわ」
「えっ、それって、かりんさんはケン・マスターズの技を使えないってこと？」
「わたくしの気の性質では、あのような放出系の技は向いていません。鍛錬を積めば多少は真似事のような技は使えるでしょうけど、本家には遠く及ばないレベルでしか使えないでしょうね」
「かりんさんでも使えないって、そんなにあの必殺技は難しいんだ」
　僕の小さな呟きに、ピクリと反応したかりんさんが、にっこりと満面の笑みを浮かべながら迫ってきた。
「つ・く・しっ、わたくしは難しくて〝覚えられない〟と言ったのではありませんよ。気の性質上、向いていないので〝覚えない〟と言ったのですよ。そこの所をちゃんと理解しなさいね」
　あれ、笑顔なのに何だか怖い？
「う、うん。分かった、かりんさんは向いてないから無駄な努力はしないってことだね」
「そうですわ。分かればよろしいですわ。全く、このわたくしに対して失礼な口を利くだなんて、つくしでなければ始末するところですわよ」
　かりんさんは何だか怖いことを口にしたあと、思い出したかのように言った。
「ああ、つくしもあの技は向いていませんから諦めなさい」
「えぇぇぇぇぇぇっ!?」
　驚いて叫んだ僕に、今度は怖くない笑顔を浮かべたかりんさんが説明してくれる。
「つくしの気の性質もわたくしと同じですわ。外に向かうものではなく、内に向かうものですから仕方ありませんわね」
「そんなぁ、僕には必殺技は使えないなんて…」
　ガックリとうな垂れる僕に、かりんさんは凄く嬉しそうな顔になる。

「うふふ、つくしも嬉しいでしょう。わたくしと同じタイプなのですから」
絶対にさっきの僕の発言に怒っているのだろう。
でも、この程度で許してもらえるのなら安いものだ。
「では、本日の鍛錬を始めましょう。今日はわたくしの得意技をお見せしますわ」
「かりんさんの必殺技を見せてくれるの!?」
「うふふ、必殺技というほどではなくてよ。わたくしが得意とする関節技をたっぷりと味わわせて上げますわね」
にっこりとかりんさんは笑った。どうやら許してはもらえていなかったようだ。
結論として、かりんさんを怒らせてはいけないと学んだ一日だった。

――――――――――――――

授業を受けながら僕は昨日、鍛錬が終わった後にしてくれたかりんさんの話を思い返していた。
「遠距離攻撃の手段が欲しいのでしたら、方法はありますわよ」
かりんさんは、あまりオススメは出来ないと断ってから説明してくれた。
「気を用いた技は論外ですから省きますね。その他の物理的手段としては、高速の動きによる真空波、空気を伝達材に利用した打撃、声の振動を利用した衝撃波、色々とありますが、体得する難易度と時間を考慮すれば、指弾や投げナイフ等を練習する方がよっぽど合理的ですわ」
かりんさんとしては遠距離攻撃は諦めてほしそうだった。
遠距離攻撃をマスターするための時間を他の鍛錬に費やしたいのだろう。
「もしもつくしが試合ではなくて、暴漢などの日常の不測の事態に備えて、遠距離攻撃を欲しているのでしたら、これを差し上げますわよ」
かりんさんは懐から鈍く光る金属の塊を出そうとしたから慌てて止める。

「ううんっ、要らないから大丈夫だよ！」
「あら、遠慮はいりませんわよ？」
「それをもらっても練習しなきゃ使えないし、そんな時間があれば、かりんさんとの鍛錬をしたいよ！」
「うふふ、そうなのですね。分かりましたわ。今まで以上に鍛錬に力を入れましょう」
　さくらさんの必殺技を無効化する技も練習しましょうね。と、かりんさんは楽しそうに笑ってくれた。
「かりんさんはさらりと言ってたけど、姉ちゃんの必殺技を無効化する技って、どんなんだろう？」
　どうやら僕が想像していたよりもずっと神月流格闘術は奥が深そうだ。
「関節技だけでもすごい種類があったよなぁ」
　昨日、かりんさんには一時間ほど関節技を掛けられたけど、すべて違う技だった。
　それでも半分も使ってないそうだ。
「わたくしは打撃技を好んで使っていますが、神月流格闘術は〝投・極・打〟を複合的に使用します。あらゆる敵、あらゆる局面にも対応できる無敵の格闘術ですわ」
　神月流格闘術に必殺技は存在しない。もちろん一撃で相手を倒せる威力のある技が存在しないという意味じゃなくて、一つの技だけを決め技として扱う戦い方が存在しないということだ。
　かりんさんの場合は、単に本人の趣味で打撃技を主体にしているだけだ。
「必殺技の存在しない無敵の格闘術。うんっ、それも格好いいよね！」
　僕は神月流格闘術に今まで以上に興味が湧いた。
「まずは姉ちゃんの必殺技を破ってみせるぞ!!」

第三話「つくしの初陣」

山田くんが不良にゲームソフトを取られた。不良は借りるだけだと言っていたらしいけど、そんなことは到底信じられるわけがなかった。

「僕が必ず取り返して来てやるよ」

山田くんは驚いたような顔になると僕を引き留めようとする。

「気持ちは嬉しいけど無茶だ。相手はあの代沢工業の不良なんだぜ」

代沢工業は毎年の補導者が全校生徒数を上回ると言われる悪名高い高校だった。

別名〝世田谷メトロシティ〟

小学生が立ち向かうには悪すぎる相手だった。たとえここで僕が逃げ出しても誰も責めはしないだろう。

でも、

だけどっ、

「僕は戦う!もしここで逃げ出したら、きっと僕は自分を許せなくなる!!」

僕の熱い心が伝わったのか、山田くんも何かを悟ったかのような顔になる。

「そうか、そこまでの決心をしているならもう俺は止めねえぜ。行ってこいよ、お前の骨は俺が拾ってやるよ」

「はは、骨は拾わせる気はないけどね。でも…」

「ああ、分かってる。ゲームソフトを取り返してくれたら・・・お前に貸してやるよ」

「よしっ!約束だからねっ、絶対に取り返してくるからそしたら僕に貸してよねっ!!」

今期一番の話題作!!

予約殺到で僕は手に入れられなかったゲームソフトを発売日初日に借りれる!!

「僕の友情パワーを見せてやるっ!!」

僕の正義の心が今までになく熱く燃え盛る。

僕は拳を握り締めると友情のために走り出した。
走り去る僕の後ろ姿に山田くんが呟いた。
「いや、友情じゃなくて物欲だろ…」
――――――――――――――――――――
「ここが悪の根城か」
僕の前にはなんとゲームショップがそびえ立っていた。
「ゲームショップ店員が売った客からカツアゲするなんて、この世も末だよ」
僕は大きく息を吸い込むと大声で正義を叫んだ。
「出てこいっ!!子供のゲームを奪い、金を儲けようとする悪党めっ!!僕が正義の鉄槌を下してやるぞ!!」
「ああ～ん、なんだぁ?商売の邪魔をする気かぁ?」
のそりと店の扉から現れたのは、扉より大きいんじゃないかと思うほどの巨漢だった。
「で、デカい!?」
「チビガキ、邪魔をするなら排除するぞぉ」
「なっ!?」
巨漢はその巨体に似合わない素早い動きで近付いてくると殴りかかってきた。
ギリギリ躱すことが出来たけど、躱した拳は僕の後ろにあった電柱を一撃でへし折った。
「なんて威力だよ!?こんなの喰らったらタダじゃ済まないよ!!」
僕が拳を避けたことで巨漢は本気になったようだった。拳を顎のところで構えると体重を感じさせないリズミカルな動きで近付いてくる。そして素早いけど体重の乗った素早いパンチを連打してきた。
その姿はテレビで見たボクサーのようだった。
「ぐあっ!?」
このパンチはボクサーにとって、牽制用のジャブのはずなのに、一発もらっただけで僕の体力が半分以上削られたことが分かった。
朦朧とする意識の中、土下座すれば許してくれるかなぁと、考えていた僕の視界の隅に彼女が見えた気がした。

黄金の髪を風になびかせて彼女は優しく笑っていた。
ふと、彼女の唇が動いた気がした。
〝負けたら玉を一つ潰しますわよ〟
僕の正義の心が燃え上がる!!
「うぉおおおおおおっ!!!!」
朦朧とする頭を自分で殴って覚醒させる。
心臓はかつてないほどの速さで鼓動を刻む。
体が熱を帯びてくる。だけど逆に心は氷を突っ込んだようにクールだ。
突然雄叫びをあげた僕に巨漢は驚いた様子で、一瞬だけその動きを止める。
今しかない!!
僕は残っている全ての力を振り絞って巨漢に立ち向かう。
「うおっ!?このクソガキがっ!!」
懐に飛び込んだ僕に巨漢は苛立った声と共に拳を振り下ろす。
だけどその動きは力任せで先ほどまでの洗練されたボクサーの動きではなかった。
「そんなもの喰らうかぁあああっ!!」
襲いかかってくる拳を紙一重で躱すと共にその腕を掴む。
拳の勢いに弾かれそうになるけど、僕はその勢いをも利用して巨漢を投げ飛ばす。
「ぐわあああっ!?」
アスファルトの地面に叩きつけられた巨漢は自分の勢いと体重で重いダメージを受けたみたいだった。
「ぐぐ、ま、まだだぁ。まだ戦える…ぞぉ」
仰向けで呻いている巨漢だけど、まだ戦意は残していた。
僕は黙って仰向けで倒れている巨漢に近付くと優しく笑った。
「もう勝負はついたよ」
「お、お前…?」
僕の微笑みに何かを感じとったような巨漢は呆然とした顔になったあとゆっくりと目を閉じた。

「そうかぁ…勝負はついたかぁ」
「うん、僕の勝ちだよ！」
「ぐわぁあああっ!?……ガクッ」
〝ＹＯＵ　ＷＩＮ〟
僕は巨漢の顔面に踵を落としてＫＯした。
「正義は勝つ!!」
僕は初めての実戦を勝利で飾ることが出来た。

ちなみに、この後かりんさんの姿は見当たらなかった。きっと朦朧とする意識がみせた幻覚だったのだろう。よかった、よかった。
――――――――――――――――
「かりんお嬢様。良かったのですか、決着をお見届けになられなくて」
「うふふ、可愛い弟子につい発破をかけましたが、わたくしの弟子はあの様な雑魚に負けるほど情けなくはありませんよ」
遠ざかる高級車の中でその様な会話がされていたことに僕が気付くことはなかった。

第四話「特別な庶民」

それはいつもの特訓後に起きた出来事だった。
その日の特訓がひと段落して、柴崎さんが入れてくれた紅茶を片手に休憩がてらの雑談をしていたんだ。
学校の話題になったときに、最近は早朝特訓のおかげで授業中は気持ちよく熟睡してる。などと、当時の僕は何を思ったのか分からないけど、堂々とそんなことを口にしてしまった。
それまでは、微笑を浮かべて静かに話を聞いてくれていたかりんさんから表情が無くなった。
柴崎さんは僕にだけ聞こえる小声で「ご愁傷様です」なんてことを言ってきた。
「つくし、今のは庶民の間で流行っているという冗談というものだったのかしら？」
かりんさんは、僕にとって敬愛する師匠だ。
厳しい言葉を発するし、威圧感も半端ないものがある。だけど彼女が僕の事を考えてくれている事は間違いがない。
決して、こんな氷のような声を出す人じゃないはずだ。
「つくし、わたくしの言葉が聞こえなかったようね」
僕はそばに立つ柴崎さんに目で助けを求めた。
逸らされたっ!?
そして、かりんさんは無表情のまま、氷のような声をさらに絶対零度までに下げて再び口を開く。
「つくし、もう一度だけ確認します。先ほどの言葉は冗談ということでよろしいですわね」
「もちろんだよっ!!僕はこう見えて真面目で通っているんだよ!!それにかりんさんの弟子として恥ずかしい真似が出来るわけないよっ!!」
僕の魂の叫びは果たしてかりんさんに届くのだろうか？
かりんさんはいつの間のか俯いていたためその表情は分からない。
ゆっくりと時間が流れていく。
僕の喉が緊張のあまりゴクリとなった。

そして、かりんさんの顔がゆっくりと上げられていく。
「うふふ、つくしってば、あまり驚かせないで下さいませ。わたくしは冗談には免疫がありませんのよ」
セーーーーーフッ!!!!
どうやら僕は窮地を脱したようだ!!
〝ゆーういん〟だねっ!!
かりんさんは雰囲気を一変させて機嫌良く微笑みながら話しかけてくる。
「つくしは真面目ですものね。学業も優秀に決まっていますわよね」
「う、うんそうだね。それなりに自信があるよ」
これは嘘ではない。僕の母ちゃんは教育ママではないけど、半端なことは許さない人だ。成績が平均を下回ったらゲーム禁止を宣言されている。逆を言えば、平均以上ならどんなにゲームに熱中していても何も言わない人なのだ！
ひゃっほうだぜ、母ちゃん!!
「うふふ、流石ですね。ですが、わたくしは少し心配ですわ」
かりんさんが浮かべていた微笑を突然消して、憂いを帯びた顔になる。
「どうしたのかりんさん、何が心配なの？」
普段から傲岸不そ…ゲフンゲフン自信に溢れたかりんさんが弱気になるなんて何があるんだ？
「わたくしとの特訓の事ですわ。わたくしが忙しいため放課後ではなく、このような早朝からつくしを疲れさせてしまい、学業に影響が出ないか心配しますわ」
かりんさんは本当に申し訳なさそうな顔で僕を見つめている。
さっき僕が口を滑ら…ゲフンゲフンなんだか今日は喉の調子が悪いなあ、えっと、さっきの僕の冗談を気にしてしまったようだ。
「大丈夫だよ。僕はちゃんと勉強してるからさ、心配しないでよ」
かりんさんを心配させないように僕は笑顔でそう答える。
「つくし・・・うふふ、どうやらわたくしが心配性すぎたようですわね。でもあまり無理をしては駄目ですわよ」

「うん、そうだね。確かに授業中は疲れて眠くなる時もあるからね」
僕の答えに安心してくれたみたいで、かりんさんは笑ってくれた。
だけど、それでも僕を心配した言葉を口にする。
そんなかりんさんに、僕は思わず軽口を叩いて場を明るくしようした。
その瞬間、キラーンとかりんさんの目が光った気がしたけど気のせいだよね？
「それはいけませんわ！そういえば庶民の学校では、個人の才能や資質それに事情などを考慮せずに画一的な授業を一方的に押し付ける風潮がありますわね。確かにそれは庶民を養成する事を主眼に考えれば、あながち間違った方策であるとは断言できません。ですが貴方の場合、一般の庶民とは既に立ち位置すら異なっています。何故ならば貴方は…つくしは、この神月かりんの唯一の弟子なのですよ。次期神月財閥総帥であるこの神月かりんの唯一の弟子として、つくしにはそれに相応しい教育を受ける権利が…いえ、義務があるのですわ。あえて語るなら、つくしはわたくしの唯一の弟子となった天に選ばれし『特別な庶民』なのですわ」
「えっと、つまり僕はどうしたらいいの？」
かりんさんのマシンガントークに圧倒されてしまった僕は混乱してしまった。
「うふふ、全てはこの神月かりんにお任せなさい。つくしの為にわたくしが出来る限りの事をして差し上げますわ」
優しく笑うかりんさんに混乱中の僕は素直に頷くしかなかった。
「う、うん、かりんさんに任せるね」
「おーほほほほっ、任されましたわ！」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
この後、僕の小学校に特別クラスが設立された。特別講師として国内外の優秀な人物達が招聘された。
講師達は驚くほどの熱意を持って教鞭をとり指導した。
その熱意は己の命が懸かっているんじゃないかと思えるほどだったと、後に同僚となった教師達は語る。

そして、その特別クラスに編入となった生徒名簿に〝つくし〟という名前があった事は語るまでもないだろう。
「なんでこうなったんだ!?」
「ご愁傷様です。つくし様」

第五話「師弟と姉弟」

「友達の神月さんって人に旅行に誘われたんだけど、弟も連れてきていいってさ。つくしも行くよね？」
「ブーーーーッ!?ゲホゲホゲホッ!!」
「うわっ!?なに思いっきりお茶吹き出してんのっ！もうっ、お母さーん！つくしがお茶吹き出しちゃったー！」
姉ちゃんがバタバタと台所に駆け込んでいく。たぶん布巾を取りに行ったんだろう。
そんな事よりもさっきの話だ。
かりんさんが姉ちゃんを旅行に誘うのはいい。ライバルだけど友達でもあるからおかしくはない。
僕を旅行に誘うのもいい。僕は弟子だからこれもおかしくはない。
でも、二人いっぺんに誘うはおかしいよ!?
だって、かりんさんが僕に言ったんだよ！
「わたくしとさくらさんはライバル同士ですわ。そのわたくしが彼女の弟を弟子したと知ったなら、さくらさんも複雑になられるでしょう。ですから暫くは秘密にしましょう」
その言葉に僕も納得したから秘密にしてたのに、どうして姉ちゃんとの旅行に僕を誘ったんだ？
絶対に理由を聞かなきゃいけないな。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「あら、さくらさんは海外に行ったことがありませんの？」
「うん、いつかは武者修行に行きたいと思っているんだけどね。うちのお父さんが外国嫌いだから家族旅行も国内ばっかりなんだ」
「外国嫌い…もしや西洋人がお嫌いなのかしら？」
かりんは自分の黄金の髪に触れながらさくらに問いかける。
さくらは、かりんの瞳に僅かばかりの不安の光が宿っていることに気付き慌てて否定する。
「違うよっ、お父さんは飛行機が怖いんだって、だから国内旅行も電車でしか行かないんだよ！」

さくらは、父親の情けない秘密をアッサリと暴露する。
「お父さんは本当は飛行機が怖いだけなのに、格好悪いから外国嫌いって言ってるんだよ」
「まあ、そうでしたの。うふふ、可愛らしいお父様ですわね」
かりんが可笑しそうに笑うと、さくらもつられたように笑い出す。
「あはははっ、見栄っ張りで困っちゃうよ。でもお父さんが可愛いなんて実物を見たら絶対思わないよー」
「そんな事はないと思いますけど。そういえば、お父様が飛行機嫌いという事は、さくらさんも飛行機にはお乗りになった事はないのかしら?」
ギクリとさくらは思ったが、そんな事はおくびにも出さずに笑顔で答える。
「そうなんだー、あたしは飛行機の方が速いから電車より飛行機がいいっていつも言ってるだけどねー」
「まあ、それは大変ですわね」
「うん、でもお父さんの数少ない我儘だからね。あたしが折れてあげなきゃいけないよ」
「さくらさんはお父様想いなのですね」
「えへへ〜、そんな事ないよ。もう照れちゃうからこの話題は終わりね!」
さくらは上手く話題を変える事に成功したと思い胸を撫で下ろす。
だが、そんなさくらの様子にかりんは当然のように気付いていた。
そして、さくらに見えない角度でニヤリと邪悪に笑うとその毒牙をさくらに向ける。
「それではお話は変わるのですが、今度ヨーロッパで開催される格闘大会の事をご存知かしら?」
かりんの明らさまに思える〝釣り〟に能天気なさくらは気付かない。
「知ってるよ!あのケン・マスターズも出場する大会だよねっ、他の選手達も世界レベルの人達ばっかりで、すっごいハイレベルな大会だよねっ!!」

かりんは飛び跳ねる獲物にほくそ笑む。
「うふふ、実はその大会の特別招待券を知り合いの方に頂きましたの」
「うわあ、いいなあ！」
かりんはギュンギュンとした反応に心が躍る。
「わたくしは父と行くつもりだったのですが、父の予定が合わなくなってしまい困っていますの」
「えっ、それってもしかして!?」
かりんは獲物の手応えに嗤う。
「さくらさんさえ良ければ、御招待させて頂きますから御一緒に行きませんか？」
「もちろん行くよっ、誘ってくれてありがとう！」
かりんは見事に獲物を〝釣り〟上げてほくそ笑む。
「うふふ、楽しみですわね」
「うん！あ、でもつくしの奴が拗ねちゃうだろうなぁ」
「つくし…さん、さくらさんの弟さんですわよね」
「うん、弟も格闘技が好きだから、あたしだけ見に行くのを知ったら、きっと拗ねちゃうだろうな」
さくらの顔が僅かに曇る。
春日野姉弟は、この年代の異性の姉弟にしては仲が良かった。
特にさくらにとっては、小さな頃から手のかかる弟の事を大事に思っていた。
いわゆる〝馬鹿な子ほど可愛い〟というやつである。
もっとも、つくしに言わせれば、自分よりも姉ちゃんの方が百万倍馬鹿だ。と答えるだろう。
「仲の良い姉弟なのですね」
かりんは平常を装い答えるが、内心は焦っていた。
この会話の流れは、つくしを誘うパターンになると、かりんのお嬢様としての勘が告げていた。
もちろん、つくしを連れて行くことは本来ならば問題ない。
むしろ、つくしとさくらに囲まれての格闘技観戦ならば嬉しくて、神月流舞踏術奥義〝胡蝶の舞〟を意味もなく披露してしまうぐらい

だ。
だが、今は状況が不味かった。
かりんがつくしを弟子としている事は、さくらには秘密なのだから。
何故秘密にしているかというと、つくしにはそれっぽい事を言ったが、かりんの本心は違った。
かりんは、ライバルにして友人であるさくらの実の弟を愛弟子として可愛がっている。その事をさくらに知られるのが嫌だったのだ。
かりんは、つくしに対して特訓中は、師として厳しく接しているつもりだ。
だが、それ以外では自分でもつくしに甘いことを自覚している。
はっきり言ってしまえば、お姉さんぶって可愛がっているのだ。
その事をさくらに知られたなら、きっとさくらは微笑ましい目をかりんに向ける事だろう。
その状況を想像するだけで、かりんは身悶えるような羞恥心を感じてしまう。
だからこそ、つくしに口止めをしていたのだった。
「うーん、仲が良いのかなぁ。最近はすっかり生意気になっちゃったけど」
「うふふ、喧嘩するほど仲が良いと言いますわよ」
「うん、そうだね。なんだかんだ言っても弟だもん。やっぱり可愛いよ！」
かりんは慎重に会話を進める。なんとか格闘技大会から話を変えようと頑張ってみる。
「そんなつくしを置いて、あたしだけ大会に行くなんてやっぱり…」
かりんの頑張りは無駄だった。
さくらは捨てられた子犬のような目でかりんを見つめている。
キューンという鳴き声さえ聞こえてきそうだった。
「あの、神月さん。やっぱりさっきの話は…」
さくらは冬の日に捨てられた子犬のように震えながらかりんを見つめている。

幻の雪が降っているのが見えてきそうなほどだった。
「も、もちろん、さくらさんの弟さんもご招待致しますわ」
さくらの視線の圧力に晒されたかりんはそう答えるしかなかった。
「わーい!やったぁああぁっ!!神月さんありがとーっ!!大好きっ!!」
さくらは喜びの余りかりんに抱きつく。
かりんは先ほどの答えを後悔することは生涯ないだろうと、さくらに抱き締められながら思った。

――――――――――――――――

「なるほど、そういう事だったたんだ」
「ええ、そうなんですよ。おほほほ」
僕の前には、いつもの覇気が感じられないかりんさんがいた。
「つまり姉ちゃんが飛行機が怖い事を察して、からかうために格闘技観戦を餌にしたわけだね」
「これもまた女の戦いですわ。おほほほ」
僕の前には、いつもの威圧感が感じられないかりんさんがいた。
「それで、僕達は初対面の振りをすれば良いんだよね」
「そうね。そうしましょうね。おほほほ」
僕の前には、いつもの厳しさが感じられない、
「つくし、旅行が楽しみですわね。おほほほ」
「うん、そうだね。かりんさん」
親しみを感じるかりんさんがいた。

第六話「ヨーロッパへ」

神月財閥が所有するプライベートジェット機の豪華な客室内で僕とかりんさんは対峙していた。
「うふふ、このわたくしに勝てると思っているのかしら」
「いつまでも自分の方が強いと思い込んでいたら足元をすくわれるよ」
僕たちの間で見えない火花が飛び散る。
かりんさんの鋭い眼光に晒されながらも僕は一歩も退く気がなかった。
そう、今の僕はこの間までの僕ではない。
〝男子三日会わざれば刮目して見よ〟
この言葉が示すように、今ここに立つ僕はかりんさんに負けた時の僕とは違う。
潜り抜けたきた数多の鉄火場が僕を鍛えてくれた。
死力を尽くし合った強敵(とも)達が僕を強くした。
たとえ、かりんさん相手だろうと絶対に負けはしない。
揺るぎない自信と決意に支えられて、僕はここに立っている。
そんな僕に何かを感じ取ったのだろう。かりんさんはその鋭い眼光を緩める。
「いつの間にか男の顔をするようになったのですね・・・つくし」
まるで子供の成長を喜びながらもどこか寂しげな母のような雰囲気を纏いながら、かりんさんは呟く。
「貴女の背を追いかけるだけでは決して貴女を追い抜けない事に気付いただけですよ」
かりんさんに勝つために費やしてきたもの、そのために積み上げてきたもの、それらの思いを胸に僕はかりんさんに宣戦布告をする。
「今の僕は世田谷区ゲームチャンプの名を背負っているんだっ!!この名にかけて貴女に勝つっ!!」
実はこのあいだ行われた東京ゲーム大会の地区予選で、僕は世田谷区優勝を果たした。

そこで繰り広げられた数々の熱い戦いのことは機会あれば語ろうと思う。
・・・ちなみに本戦は一回戦で負けた。
「あら、わたくしは先日の世界大会で優勝しましたわよ」
「何やってんのっ、かりんさん!?」
多忙を極めるはずの神月財閥の次期総帥がゲーム世界大会に出場するなんて、しかも優勝って、どんだけやり込んでいるんだよ。
「我が神月には「万事において常に勝利者であるべし」という家訓があります。ゲームといっても例外ではありませんわ」
ふふん、といった得意げな表情で胸を張るかりんさん。
「いや、大財閥のお嬢様がドヤ顔で言うセリフじゃないと思うんだけど」
「オーホホホホ、この世界ゲームチャンプのわたくしが世界の壁の高さというものを教えて差し上げますわ。世田谷区ゲームチャンプさん、覚悟を決めてかかって来なさいな」
まるでやんちゃな子供のグルグルパンチを歯牙にも掛けない父親のような大きな存在感を放ちながら、かりんさんは高笑いをする。
ウググ…い、いや、大丈夫だ。肩書きなんか関係ないっ、自分のゲーム歴を思い出すんだ！僕のゲーム歴はかりんさんとは比較にならない程に長いんだ。既にベテランの域に入っているといっても過言じゃないぞ！よしっ、ベテランの底力をかりんさんに教えてやる！
「それじゃ、対戦ゲームは僕が決めてもいいかな？」
「うふふ、せめてものハンデです。つくしの得意なゲームで良いですわよ」
かかった！
かりんさんは有名どころの格闘ゲームは全て押さえているかもだけど、僕は対戦ゲームとしか言っていない。
そうっ!!
ゲーム歴の浅いかりんさんにとって、対戦ゲームといえば格闘ゲームの事だと思い込んでいるはずだ！
だがしかしっ、僕が選ぶのはこれだっ!!

「〝金太郎電鉄〟で勝負だっ!!」
そう、かつて一世を風靡した双六ゲームだ。複数人プレイで日本一周を競い合う双六ゲームだから、反射神経も知識も必要のないただの運ゲーだ。だからこそ僕の勝ち目も当然ある!!
(ちなみに制限タイムになると熊に乗った金太郎がマサカリを振り回しながらプレイヤーを追いかけてくるという恐ろしいイベントがある。そして金太郎に追いつかれると凄まじく恐ろしい阿鼻叫喚のムービーが流れる。そのインパクトは全国の小学生達を恐怖のドン底に突き落としたという曰く付きのゲームだ)
「さあっ、金太郎電鉄で勝負だ!!」
気合を入れて声を上げる僕だけど、かりんさんは困ったような表情で首をかしげる。
「そのようなゲームは持っていませんわ」
「しまったぁあああっ!!格闘ゲームしかプレイしないかりんさんが双六ゲームなんか持ってるわけないじゃないかぁあああっ!!」
こんな事なら自分のゲームソフトを持ってくればよかったと頭を抱えて後悔する。
「あら、格闘ゲーム以外も持っていますわよ」
「えっ、本当に!?何があるの?」
僕はかりんさんの言葉に一縷の望みをかける。
「シューティングゲームですわ」
反射神経や攻略パターンの知識がいるやつだ。
つまり、かりんさんが得意なジャンルだった。
「はぁ、でも仕方ないか。それで、シューティングの場合は獲得点数を競うの?」
僕が対戦ルールを確認すると、かりんさんは少し考えた後、首を横に振る。
「せっかくですから、勝負は気にせずに協力プレイでゲームを楽しみましょう」
そして、僕とかりんさんはヨーロッパに到着するまでの間、二人で楽しくゲームを楽しんだ。

ちなみに姉ちゃんは、ジェット機が動き出した時点で固まったまま動かないから放置している。
かりんさんも最初は姉ちゃんをからかう気満々だったけど、真っ青な顔でピクリとも動かない姉ちゃんを見て流石に気の毒になったみたいで、武士の情けですわ。と言いながらスルーした。
ーーー

ていただけよ！」
危ない危ない、かりんさんとは初対面だという設定をつい忘れてしまっていた。
でも、姉ちゃんの意識がない間に二人でゲームをして仲良くなったという話を素直に信じてくれた。
チョロいぞ、姉ちゃん。
「ゴメンね、神月さん。弟の面倒をみさせちゃって」
「あら、構いませんわよ。わたくしには兄弟がいませんから、弟が出来たみたいで楽しいですわ」
「僕も姉ちゃんよりかりんさんの方が優しいから一緒にいて楽しいよ」
「ウググ、こいつは・・・はぁ、神月さん、こんな小憎たらしい弟で本当にゴメンね。生意気なことを言ったら遠慮なく引っぱたいていいよ」
「うふふ、男の子は少しぐらい生意気なぐらいが可愛いですわ」
かりんさんはそう言って僕の頭を撫でる。
これは今回の旅行前にかりんさんと決めておいた作戦だ。
僕達は初対面から徐々に仲良くなっていき、自然と格闘技を習う関係になったと姉ちゃんに思わせる為だ。
旅行から帰った後も姉ちゃんを交えて遊ぶ計画だってあったりする。
でも面倒くさい話だよね。
女の人が考えることはよく分かんないや。
「かりんさん、男にとって可愛いは褒め言葉じゃないよ。ここは格好良いが正解だよ」
「あら、確かにそうね。ごめんさない、Ｍｒ．つくし」
「うそぉおおおおおっ!?」
「姉ちゃん、うるさいぞ」
「だ、だって！あの神月さんが謝るだなんて異常事態だよっ!!」
姉ちゃんが本気で驚いてるみたいだけど、どういう事だろう？
かりんさんは別に絶対に謝らないキャラじゃないと思うけど。

僕との組手中に力加減を間違えて締め落ちした時は直ぐに謝ってくれるしね。
学校だと違うのかな？
「姉ちゃん、かりんさんって学校じゃどんな感じなの？」
「そりゃあ、もちろん！」
「もちろん？」
「っ!?」
突然、姉ちゃんの顔色が変わった。
青い顔して僕の背後を見ているけど後ろにはかりんさんがいるだけで何もないはずだけど。
気になって振り向いてみても、やっぱりニコニコと笑っているかりんさんがいるだけだ。
変な姉ちゃんだな。いや、変なのは元からか。
「姉ちゃん？」
「が、学校での神月さんは感じのいいお嬢様だったり？」
「なんで疑問系なんだよ。でも、感じのいいお嬢様か。確かにかりんさんは最初こそ傍若無人な雰囲気で取っつきにくいけど、親しくなったら優しいとこや気遣ってくれるとこが分かってくるもんね」
よかった。かりんさんは僕が言うのもあれだけど、クセが強いから学校で上手くやってるか少し心配だったんだ。
「つくし…あんた、大物だね」
なぜか姉ちゃんが呆然とした顔をしている。
「うふふふ、そのように言われては照れてしまいますわ。子供がお世辞を言うものじゃありませんわよ」
かりんさんの方は少し顔を赤くしながら僕の頭を嬉しそうに撫でていた。（撫でられすぎてハゲないか少し心配だ）
でもお世辞じゃないんだけど。
かりんさんは毎朝格闘技の指導をしてくれるし、時間があれば放課後や休日も相手をしてくれる。
それに格闘技以外のことでも面倒をみてくれる優しい人だ。
…特別クラスは止めてほしいけど。

「かりんさん、次は向こうのお店に行こうよ」
僕はさっきから気になっていたお店を指差して、かりんさんを引っ張っていく。
「あまり急いだら転びますわよ」
「あっ、待ってよ！あたしも行くよ！」
僕たち三人は日が暮れるまでヨーロッパの街を遊び歩いた。

第七話「赤きサイクロン」

それは見上げるような巨大な背中だった。
「少年よ、見事だ」
僕の眼前に背を向けて立つ巨漢は、振り返る事なく僕を称賛した。
たが僕はそれに激昂を持って応える。
「邪魔だっ!!僕の前から退きやがれっ!!」
僕に前に立つ筋肉の塊のような巨漢の向こう側にいる黒服共から動揺している気配が伝わってくる。
あいつらを絶対に行かせるわけにはいかなかった。
「それともお前から倒されたいかっ!!」
既にボロボロの身体からは悲鳴が上がっている。
そして、巨漢から伝わってくる気配は間違いなく強者のものだ。
戦っても勝てる可能性など僅かすらもないだろう。
だが、僕は戦うという選択肢しか選ぶつもりはなかった。
「先ずは詫びよう、勇気ある少年よ。貴殿の誇りある戦いを汚してしまった」
巨漢の静かだが深みのある声に、頭に上っていた血が少しだけ下がった。
「いや、こっちも悪かった。ただ、そこを退いてほしい。あいつらを行かせるわけにはいかないんだ」
「もうひとつ詫びよう、誇り高き少年よ。貴殿の退くことが出来ぬ戦いを奪うことを」
その言葉と同時に巨漢は宙高く舞った。
黒服達は１０ｍ近い高さまで巨漢が舞うという信じられない光景に動きを止めていた。
「喰らえいっ!!我が鋼の肉体を!!」
そこには技術も理論も介在する余地などない。ただ鍛え上げられた〝純粋な筋肉〟があった。
殆どの黒服共は巨漢の鋼の肉体に押し潰されたが、幾人かは運良く潰されずにいた。

だけどそれが運が良かったのかは疑問だろう。
なにしろその後は、その鋼の肉体から繰り出される芸術的にすら思える数々の投げ技で倒されていったのだから。
僕は最後の黒服が倒されたのを見届けた後、意識を失った。
ーーー

見知らぬ異国の地で迷子になった途端、日本語の分かる子に出会えるなんて、しかもこの子って、気の強そうな雰囲気がかりんさんに似ていて外国人でも話しやすいよ。
「〝やったあああ〟って、どういう意味だ？」
「えっと、どう言えばいいんだろ？」
これまでの人生で〝やった〟という言葉の意味を考えた事などなかった。
意識せずに喋っているし、聞いた時も意識せずに理解していた。
自分が喋っている言葉の意味を問われることがこんなに難しいなんて。
外国語が喋れる人ってやっぱり凄いんだな。
「えっと、初めて訪れた異国の地で、君に出会えた事はきっと神様が、君と僕とを此処で出会わせる為に運命の采配をしてくれたんだと思うんだ。だから嬉しくて、その嬉しいと思う感情が思わず口から溢れたのが〝やったあああ〟って言葉なんだよ。分かったかな？」
「ああ、日本語が話せる事と、日本語を教えられる事は、別物という事がお前の説明でよく分かった」
「うんうん、分かって貰えたんなら嬉しいよ」
流石は僕だ。
生まれてからずっと日本人をやってるんだから日本語の説明ぐらい本気になれば出来るのさ。
「やっぱり日本語は難しいな。私の言葉が正しく伝わっている気がしない」
「大丈夫だよ、ちゃんと伝わっているよ！」
彼女は自分の日本語力に不安を覚えているようだけど大丈夫。
こうやって分からない単語があれば直ぐに聞くほど勉強家なんだから直ぐに僕レベルになれるよ。
「・・・私達が出会えた事は運命か」
「うんうん、この出会いを大事にしよう！」
僕はフレンドリーに彼女の手を握ると近くにある喫茶店に誘う。
これで道案内も確保出来たし、急いでかりんさんと合流する必要も

ないからね。
彼女にお礼の前払いで甘いものでもご馳走しよう。
決して慌てたせいでお腹が空いたわけではないよ。
「これを食べていいのか？」
「もちろんだよ、足りなかったら好きなだけお代わりしてよ」
僕達の前にはパフェとケーキとジュースが並べられていた。
彼女はメニューは読めるけど、どんな物か分からないというから代わりに女の子が好きそうな物を注文した。
「甘くて美味しいな」
「それは良かった、いっぱい食べてよ」
「うん」
食べながら僕は自分の事情を説明した。
迷子という事は上手く誤魔化して説明出来たと思う。
「そのホテルなら分かるから案内できる。そうか迷子で心細かったから泣いていたんだな」
上手く説明出来てなかったみたいだ。
口止めはしておこう。
「ふふ、分かった。お前の仲間には内緒にしよう」
微笑ましいものを見るような顔をされてしまった。
「そうだ、僕の名前は春日野つくしって言うんだ。名前で呼んでほしいな」
苗字だと姉ちゃんと区別がつかないからと続けるけど、なぜか彼女は暗い顔になる。
一体どうしたのか事情を訪ねてみた。
「私には記憶がないんだ。だからつくしに返せる名前が私にはない」
「ふぇ!?」
なんだってぇぇぇぇっ!!??!!!
かつてない程の驚愕が僕を襲う。
記憶がないだって!?
そんなとんでも無い話がこんな何気無い会話でポロッと出るなんて、やっぱり外国は日本とは違うな!!

それから彼女から色々と話を聞いた。
突っ込んで聞いていい話なのかは分からなかったけど、聞いたら素直に話してくれたから聞いて良かったのだろう。
「怪しい組織に捕まって記憶を奪われた上で、人を殺す訓練をさせられていた…」
「ああ、そうだ。それと礼を言わせてほしい」
「礼…？」
「私の話を聞いてくれてありがとう。これで私は誰にも知られずに死ぬわけじゃないと思うと…心が楽になった」
そう言って彼女は笑顔をみせた。
ドガアアアア!!!!!
「つ、つくし…？」
その笑顔をみた瞬間、何かが込み上げてきた。耐えきれないその何かに僕は目の前のテーブルに拳を叩きつけていた。
「…君に名前を贈らせてほしい。嫌かな？」
僕の言葉に彼女が目を見張る。
「い、嫌じゃない！私に名前を付けて欲しい！」
それまで常に冷静だった彼女が動揺した。その事がなぜか分からないけど嬉しかった。
そして、僕は彼女に名前を贈ると考えた時に自然と浮かんできた名前を口にする。
「キャミィ」
「キャ…ミィ…？」
「そう、君の名前はキャミィだ！」
「キャミィ、私の名前はキャミィ…」
彼女は…キャミィは噛みしめるように自分の名前を口にする。
このときの僕は、非常に他力本願で嫌になるけど、かりんさんに土下座してでもキャミィの事をお願いしようと思っていた。
だけどこの後、世界というものは僕みたいな子供が考えるほど優しいものじゃない事を思い知ることになる。
ーーー

僕達はホテルに向かっていた。
かりんさんが戻っているかは分からないけど、キャミィは追われている可能性が高いから高いセキュリティに守られているホテルにいる方がいいと思ったからだ。
キャミィが組織から逃げられたのは偶然にも訓練中に乗っていたヘリコプターが故障で墜落したからしい。
乗っていたヘリコプターは墜落のショックで爆発したそうだけど、キャミィだけは墜落する寸前にヘリコプターから飛び降りて助かったらしい。
墜落中のヘリコプターから飛び降りて助かるものなのか非常に疑問ではあるけど。
「私は丈夫だからな！」
そう言って胸を張るキャミィ。
あれ？なんか性格が変わってきてない？
「まあ、いっか。それより早くホテルに戻ろう」
その時、僕達の進路を塞ぐように車が突っ込んできた。
車から黒服の男達が降りてくる。
「まさかと思っていたが本当に生きていたか」
「やはり化け物はしぶといな」
「おい、急ぐぞ。人目にはつきたくない」
「男のガキはどうするんだ？」
「ハッ、化け物のくせに男をたらし込んだの…カハッ!?」
あれ？
黒服達が喋ってる間に逃げる方法を考えていた筈なのに、気付いたら一人の黒服に肘を叩き込んでいた。
「ゲホゲホッ、このクソガキがっ！ブッ殺せ!!」
〝裡門頂肘〟黒服が油断してくれていたお陰でまともに喰らってくれた。
僕が使える打撃技だと最強の威力を誇るけど、一撃だとやっぱり倒しきれなかったな。
「私を置いて逃げろ。逃げる時間は私が稼ぐ」

「うん、キャミィはそう言うと思ったよ。だけどそれは聞けないよ」
「今は言い争っている時間はないんだ！お前に出会えて良かった。僅かな時間だったがお前に出会えた運命を神に感謝しよう。さあっ、早く行けっ!!」
キャミィは黒服達の元に走り出そうとしたけど、そんな事は僕は許さない。
キャミィの肩を掴むと強引に後方に放り投げる。
「なっ!?なんだこの力はっ!!」
思った通りキャミィは上手く着地してくれた。だけど、たかが12歳の僕が自分を放り投げるなんて荒技をみせたことに驚いている。
そして僕の思惑通りに黒服達も警戒して動きを止めて様子を伺っているぞ。
「時間稼ぎは僕がやる。キャミィはホテルに急いで助けを呼んでほしい。それが助かる確率が一番高いはずだ！」
僕の言葉にキャミィは苦しそうな表情になるけど、僕の力をみせたお陰でなんとか自分自身を納得させてホテルに向かってくれた。
向かう前に、僕が死んだら私も後を追って死ぬから絶対に死ぬなと言われたけどね。
…ホントに後を追ったりしないよね？
「さて、本気を出しちゃおうかな」
僕は黒服達と対峙しながらズキズキと痛む身体に苦笑してしまう。
黒服への一撃とキャミィを投げただけで既に限界に近い頼りない身体だった。
自己暗示と気の操作による一時的な身体強化…という名のただのリミッター外し。
それが僕の本気の正体だった。
人の筋肉が最大の力を発揮すると、その負荷に身体が耐えられないというのはよく聞く話だ。
そしてそのリミッターを外すことによって普段以上の力を発揮するというのもよく聞く話だね。
かりんさんからは絶対に使うなと言われていた。

何しろ今のかりんさんでも３０秒しか耐えられないらしい。
そんな危険な技を教えてくれた理由は、これが神月流格闘術にとって必要不可欠な技である事と、後はいざという時の保険らしい。
もしも僕に死の危険が迫った時に一瞬だけ使って窮地を脱しろって言っていた。
それでも３秒以上は使うな。使えばその時は助かっても直ぐに死ぬって言われた。
そして、最後にこうも言っていた。
〝もしも、己の死を覚悟しても望むものがあるのでしたら、己の誇りにかけて譲れないものがあるのでしたら、その時は思う存分に使いなさい。わたくしが許します。神月流格闘術の恐ろしさをたっぷりと思い知らさせてあげなさい〟
「つまり今が使い時ってヤツだ!!」
今にも倒れそうな身体に力を注ぎ込む。
全身の筋肉が軋むのが分かる。
だけど、その痛みさえ既に朧げになっている。
つまり、全力を振るっても痛くないわけだ!!
ヒャッホウだぜ!!
自分でも知らない間に頬が釣り上がっていく。
まるで泣き笑いのような形相に黒服達が気圧されて一歩下がる。
だけどそれだけだ。
黒服達も暴力のプロだった。
目の前の小僧を仕留めてキャミィを追うために足を進める。
これ以上の足止めは無理だろう。
なら最後に暴れさせてもらう。
僕は家族とかりんさんそしてキャミィの顔を思い出してから最後の覚悟を決める。
その時だった。
彼が現れた
ーーー

側から一切の連絡がなかった。
恐らくは騙されたのだろう。
オレのように有名になり過ぎるとこの様な嫌がらせも頻繁に起きる。
これもオレの筋肉に嫉妬する小者共のせいだ。
オレは多少、気を荒くしていたがこの程度で激怒するほどオレの筋肉は安くはない。
帰りの便まで暇つぶしにと街を散策していると、街で微笑ましいカップルを見つけた。
少年はまだまだ筋肉量は少ないが、歳の割によく鍛えていることが服の上からでも分かった。
少女の方もしなやかさの中に強さを感じる良い筋肉を持っている。
国籍は違うようだが、仲良く甘い物をパクつく姿は頬を緩ませる。
オレは少し心が癒されて再び街の散策に戻る。
暫くすると何処かで車の急ブレーキ音が聞こえてきた。
このような閑静な場所で珍しいと思い、その音が聞こえた場所へ向かった。
そこでオレは先ほどの少年と再会する。
少年は獰猛に笑っていた。
その鬼気迫る笑みにこのオレですら一瞬だが怖気が走った。
だが、直ぐに驚嘆する。
少年は既に満身創痍だった。
少年の敵であろう黒服達は気付いていないだろう。だがオレの耳には聞こえていた。
少年の全身の筋肉が悲鳴を上げているのが、そして同時に筋肉が歓喜の声を上げているのが、オレには聞こえていた。
大事に鍛えられた筋肉が己の主人の為にその持てる力の全てを…
いや、持てる以上の力を振り絞り、主人の為にと怒号を発して敵に立ち向かわんとするその勇姿はオレの心に火をつけた!!
なんという猛々しくも健気な筋肉なのだっ!!
まだ幼いとも言える主人の矜持を守るためだろう!!

限界を迎え!!限界を越え!!限界を打ち破らんとする神々しい姿!!
だがその尊き想いが今まさにオレの前で潰えようとしている!!
突然、オレの筋肉が落雷の如く天命に気付く!!
オレがこの国に来たのはこの天に愛されし筋肉を救う為だったのだぁあああっ!!
オレの筋肉が跳躍する!!
黒服達の眼前に降り立ちオレの筋肉が少年を守るために燃え上がる!!
そして神に愛されし筋肉の主たる少年によくぞここまでの筋肉を育てたと賞賛の言葉を贈ろう!!
「少年よ、見事だ」

第八話「英雄の言葉」

「っ!?い、痛っ!?」
　目覚めると共に飛び起きた僕は、全身を貫く激痛に呼吸すら満足に出来なくなる。
「つくしっ!?目を覚ましたんだな!!」
「キャ、キャミィ?よ、良かった、無事だったんだね」
　僕が寝かされているベッドの横に置かれた椅子にキャミィが心配そうな顔で腰掛けていた。
「あまり喋るな、まだ痛むはずだ」
　キャミィは優しく僕の身体を支えてベッドに寝かせてくれる。
「ありがとう、キャミィ」
「いや、礼は私に言わせてくれ。つくし、ありがとう。私を守ってくれて」
　キャミィの瞳が涙で滲んでいた。
「全部聞いた。つくしがどれほど無茶な事をしたのか…つくしがどれほど無謀な事をしたのか…」
　そこまで言うとキャミィは僕に覆い被さるように抱き締めてきた。
　そして耳元で聞こえてくる声は嗚咽交じりだった。
「そしてつくしがどれほど頑張ってくれたのかを…私は、全部聞いた!!」
　最後には泣きじゃくるキャミィの頭を僕は黙って撫でる事しか出来なかった。
ーーー

「ですが、つくしは見事に彼女を救ってみせました。その行為は賞賛に値します」
「…ううん、違う。結局僕も助けられただけで…そ、そうだっ!!僕を助けてくれたあの人は何処に!?」
今頃になって思い出した！
僕を助けてくれたあの人にお礼を言わなくちゃ!!
「つくしを救ってくれた方はもう母国に出立されましたわ。その彼から貴方が目覚めたら伝えて欲しいと伝言を預かっております」
そうか、あの人はもういないのか。
僕は助けられたお礼も言えなかった。
でも僕に伝言を残してくれた。
「あの人の伝言…」
「つくし、心してお聞きなさい。かの偉大なる英雄の言葉を」
かりんさんは居住まいを正すと彼が残してくれた言葉を口にする。
『少年よ、お前はきっとオレに助けられたと思っているだろう』
その通りだ。散々格好つけた挙句、僕は貴方に助けられただけの…運が良いだけの、馬鹿な子供だ。
そう思い僕はこうべを垂れるしかなかった。
『ふざけるなっ!!』
突然かりんさんが吠えた。
たぶんこれはあの人が言った言葉そのままなのだろうけど、かりんさんも真剣な瞳をしている。
『お前は助けられたのではない!!お前は守ったのだ!!お前の前にいる彼女が無事なのは間違いなくお前が守ったからだ!!オレはその僅かばかりの手助けをしたにすぎん!!』
…きっと彼は僕が落ち込むだろうと予測してこんな言葉を残してくれたんだろう。本当に凄い人だ。
『…と言ったところでお前は素直に認めんだろう。お前はそういう阿呆だとお前の師が言っておった』
か、かりんさん…？
『確かにオレが馬鹿者共を倒した。だがその前にだ。お前が戦ったか

らこそオレが間に合ったのだ!!お前が彼女を守り抜いたからこそオレが間に合ったのだ!!それを忘れるな!!』
その言葉に僕は慰められる。
卑小な力しか持たない僕でも彼女を助ける為の役に少しだけでも立ったんだから。
『オレはここまでの言えばオレの真意が伝わると思ったが、お前の師がこれだけでは物凄い阿呆のお前には伝わりきらんと言うから補足しよう』
かりんさんっ!?
あれ、僕の訴える視線は無視して澄まし顔のままで続けるの!?
『少年よ、彼女を…キャミィを見つめてみろ』
え…?
よく分からないけど、僕は言われるままキャミィを見た。
キャミィは柔らかい笑みを浮かべていた。
初めて会ったときの硬い表情はいつの間にか無くなっていた。
『１００歩譲って、オレがお前達を助けたとしよう』
いや間違いなく貴方が助けてくれましたよ。
『だがオレではキャミィを笑顔には出来んかった』
その言葉に僕はかりんさんを振り返る。
かりんさんはいつもより優しい顔で僕を見つめていた。
『きっとお前の前にいるキャミィはお前に笑顔を見せているだろう。それはお前だから成し遂げる事が出来たのだ。お前は純粋に喜ぶだけでいい。笑顔を失った少女が再び笑顔を取り戻した事を。そしてオレはそんなお前の事をこう思うだけだ』
かりんさんは思いっきり息を吸い込む。
『少年よっ!!見事だぁあああっ!!!!』
ーーー

〝赤きサイクロン〟彼の二つ名の通りの熱い人だった。いつかロシアに行き成長した姿を見せるために僕はさらなる特訓を重ねよう。
今回の事のお礼はその時に改めてしようと思う。
キャミィの事はかりんさんが全面的に請け負ってくれた。
色々とヤバい事情があるけどそんな事は気にするなと言ってくれた。
「わたくしの愛弟子がその誇りにかけて救った少女です。この〝神月かりん〟が、この名に懸けて立派な嫁候補に磨き上げて差し上げますわ・・・あくまでも〝候補〟ですわよ」
ちょっと勘違いがあるみたいだけど、まあ、かりんさんに任せておけば安心だと思う。
ところで黒服達はどうなったんだろう？
かりんさんに聞いても「つくしにはまだこういう話は早いですわ」と言って教えてくれなかった。
そうそう、姉ちゃんは今回の事は何も知らない。
僕が迷子になっている間に食べたものに当たって食中毒で緊急入院したらしい。
実は僕が入院した病院に姉ちゃんも入院していた。
身体が動くようになってからお見舞いに行ったら来るのが遅いと怒られた。
そして、キャミィは
「キャミィは姉ちゃん達と同い年みたいだね」
遺伝子検査とかでだいだいの年齢が分かったそうだ。
「そうか、私としてはつくしと同じ方が良かったな」
そう言って僕を見るキャミィの視線の高さは、姉ちゃんやかりんさんと殆ど変わらないから僕と同じ年とは最初から考えてなかった。
そういえば、最初から僕がフレンドリーに接する事が出来たのもキャミィの雰囲気がかりんさんに似ていたからだし、年齢も姉ちゃん達と一緒ぐらいかなと思って、同じ感覚で喋れたからだった。
そう言ったらキャミィも「年上で良かった」と言っていた。

「それで、キャミィは本当に行っちゃうの？」
「ああ、このままつくし達と一緒に居るわけにはいかないからな」
「そう、だね」
　キャミィがいた怪しい組織は神月財閥の力を持ってしても簡単な相手ではないみたいだ。
　かりんさんからもキャミィに会うのは暫くは無理になると言われていた。
「そんな顔をするな。二度と会えないわけじゃないんだ。すぐに私は戻ってくる」
「うん」
　本当はキャミィを励ますべきなのに僕はキャミィと会えなくなると思うと暗くなってしまった。
　そんな僕を見て、何故かキャミィは嬉しそうに笑った。
「ふふ、すまない。だけど嬉しいんだ」
「嬉しい…？」
「つくしが私と会えない事を寂しがってくれる事がーー理由は分からないけど私は凄く嬉しいんだ！」
　キャミィの満面の笑みは凄く可愛くて、それを見た僕の胸はドキドキしていた。

ーーー

第九話「弟の戦い」

夜の繁華街で僕はその男と出会った。
その日、ゲームセンターの対戦ゲームで無双しまくった僕は、意気揚々と自宅へと凱旋していた。
その途中で男のストリートファイトの現場に出くわした。
男は目にも鮮やかなピンクの道着に身を包み、次々と対戦相手を倒していった。
だけど最後の対戦相手として出てきた相手は男よりもふた回りは身体が大きく、身のこなしも只者ではない事を感じさせるジーンズ姿の男だった。
そして始まったファイトはまさに死闘と呼ぶに相応しいものだった。
その一進一退の攻防に観客達は沸き立ち、その大歓声に僕の身体も震えるほどだった。
そしてファイトの終盤、体力が残り少なくなったジーンズ男が、最後の力を振り絞って放った一撃を男は大きく下に沈み込みことで躱した。
次の瞬間、男の全身が光に包まれた。
「喰らえいっ!!真・晃龍拳!!」
輝きながら放ったその一撃は、ジーンズ男の顎を見事に撃ち抜いた。
吹き飛ぶジーンズ男に背を向けて男は観客達を見渡した後、親指を立てて声も高らかに宣言する。
「余裕っす!」
なんて凄い漢なのだろう。
余裕などあるはずもない程にボロボロになりながらも、強気を崩さずに意地を張り通すその姿に僕は〝漢〟というものを強く意識させられた。
「もうっ、何が余裕っすなのよ!ボロボロじゃない!ほら、手当てするからこっちに来てよ」

そんな漢に近付くボーイッシュな女の子。どこかで見たことがあるような？
「うっせーな、このぐらい俺様にとっちゃ大したことねえんだよ」
「ダメだよ、火引さん。手当てはちゃんとしなくちゃ身体を壊すからね」
「チッ、さくらは俺の母ちゃんかよ」
「はいはい、文句は後で聞くから先に手当てをしちゃいますね」
なるほど、見覚えがあるはずだ。
あの女の子は僕の姉ちゃんだ。
・・・・・・あれ、姉ちゃん？
あの胡散臭いピンクの道着を着たヘボいストリートファイターのオッサンに親しげに接している女の子が僕の姉ちゃん？
「ほら、動かないでよ」
「イテテ、もう少し優しくしてくれよ。さくらぁ」
「あはは、火引さんにとってはこれくらい大したことないんでしょう」
「うぐぐ、口だけは達者になりやがって」
「火引さんだけには言われたくないなあ」
「・・・・・・おいっ!?それだと俺様が口先だけの男に聞こえるぞ!!」
「気付くのが遅いね、火引さん」
「なんだとおっ！やんのかコラッ!!」
「少し染みるよ」
「ウグッ!?もっと優しくしてくれよ！」
「はいはい、じゃ、大人しくして下さいね」
「チッ、仕方ねえなあ」
「あはは、出来るだけ優しくするから我慢して下さいね」
姉ちゃんとむさ苦しいオッサンはなんだか仲よさげな雰囲気だった。
今まで男っ気とは無縁だった姉ちゃんなのに・・・
僕はポケットから携帯電話を取り出して電話をかけた。
「もしもし、柴崎さん。スナイパーライフルを貸して欲しいんですけど。はい、インストラクターもお願いします」

ーーー

ウググと、いがみ合いながらも互いに一歩も退かない僕たちはジリジリと出口に向かって移動していく。
あと少しで逃げ出せると思った瞬間、
「そのような猿芝居で、わたくしから逃げられると本気で思っていらっしゃるなら逆にショックですわ」
かりんさんの呆れたような声が聞こえてきた。
『よしっ、怒りは静まったみたいだ！結果オーライだね！』僕は柴崎さんに目で喜びを伝えた。
柴崎さんも目で『あとで祝杯を準備致しますね』と伝えてきて喜びを共有してくれた。
「はぁ、その怪しいアイコンタクトはお止めになって下さらないかしら」
かりんさんの本気で呆れた声が聞こえてきた。
ーーー

「(お嬢様、シスコンという言葉は女兄弟を持つ男には禁句でございます。このままでは話が進まないと思われますので、シスコンについては流された方が賢明だと推察いたします)」
「(そうね、先ほどのつくしの反応だと下手に触れない方が良さそうだわ)」
かりんさんと柴崎さんがゴニョゴニョと話し合っている。何の話だろう?
いや、そんな事よりもシスコン疑惑を解く方が先だ!!
「かりんさん、僕は「冗談はここまでにしておきますわ」え、冗談?」
「ええ、先ほどはからかってしまってごめんなさいね」
なんだ、僕のシスコン疑惑はただの冗談だったのか。
うんっ、そうだよね!僕がシスコンなわけないもんね!!
「さくらさんとご一緒されていた男性は、わたくしも存じております。つくしが思われているような方ではありませんから安心なさい」
かりんさん曰く、あのオッサンはサイキョー流の師範で、姉ちゃんにとっては師というほどではないが、技のコツなどを教わっている関係らしい。
ストリートファイトにも一緒に出向いて手ほどきを受けたそうだ。
「わたくしも一時的に師事した事がある方ですわ。少々、コミカルな部分がありますが決して悪い方ではありませんよ」
かりんさんの言葉に衝撃を受ける。
「か、かりんさんがあいつに師事…?」
「はい、わたくし達は、彼ーー火引さんには大変お世話になっておりますわ」
僕の姉ちゃんがあいつに世話になっていて、僕のかりんさんもあいつの世話になっている・・・だとっ!?
「お嬢様っ、その言い方では逆効果だと思われます!!」
「はい?」
僕はユラリと立ち上がると、柴崎さんにギロリと視線を向ける。
「ひぃっ!?」
「ロリコン死すべき…だよね、柴崎さん」

「こ、個人的には反論はございません」

この日、僕は討つべき真の敵を見つけた。

第十話「つくしの成長」

早朝の河川敷で、僕はかりんさんと対峙していた。
「いきますわよ！」
かりんさんの拳が連続で繰り出される。その凄まじい速さに目は全く追いつかない。
そのため僕は、かりんさんの拳の動きだけではなく体全体の筋肉の動き、視線の向きや足の角度、そして気の流れを感じることで何とか対応する。
「うふふ、この程度なら付いてこれるようになりましたわね」
かりんさんは楽しそうに笑いながら攻撃速度を上げてくる。
そして拳での攻撃だけではなく蹴りも繰り出してきた。
上下左右からの連続攻撃に晒されながらも僕は必死に攻撃を受け流していく。
一撃でもまともに受ければ吹っ飛ばされるだろう。
僕の体は決して大きくはない。
かりんさんの剛の拳に対して馬鹿正直に防御すれば、それだけで体勢を崩されるし体力も削られてしまう。
それを防ぐには上手く攻撃の力を受け流すしかない。
「くっ、かりんさんはどんだけ体力があるんだよ！」
攻撃を受け流している僕よりも攻撃を続けているかりんさんの方が体力の消耗は激しいはずなのに、こちらの方が先に体力が尽きそうだ。
「戦場で体力を失うことは〝死〟を意味します。つくしはその身を持って知っているでしょう」
かりんさんは僕の弱音を聞くと攻撃を止めて厳しい目で見つめてきた。
かりんさんの言葉に僕はキャミィの一件を思い出す。
あの時、ザンギエフさんの助力を得られなければ、体力の尽きていた僕は死んでいただろう。
そしてキャミィも無事でいられたか分からない。

「僕は、僕は負けないっ!!」
ふらつく情けない体に喝をいれる。
こんな情けない姿をザンギエフさんに、そしてキャミィにも見せられやしない。
「ただ攻撃を受け流すだけじゃダメだ!かりんさんの攻撃を受け流すのと同時に反撃をするんだ!」
「うふふ、その通りですわ。守るだけでは勝てはしませんよ。ですが、わたくしの連撃の隙を突いて反撃することが出来るのかしら」
かりんさんは僕を挑発するような言葉を口にしながらも、その顔は僕に期待するように笑っていた。
かりんさんの連撃が僕に襲いかかる。連撃といっても、その一撃一撃に必殺の威力が込められている。
「さあっ、つくし!この程度の攻撃など鼻歌交じりに破ってみせなさい!」
これまでで最高の速度と威力で攻撃を放ちながらも、かりんさんは僕を信じてくれている。僕ならこの程度の窮地を乗り越えられると。
「その期待に応えてみせるよ!」
さっきまでとは比較にならないほど重い攻撃を必死に受け流しながら僕は耐える。
かりんさんの攻撃を受け流しているといっても、僕の技量だと体勢をその都度崩れてしまうから反撃ができない。
それならどうすればいい?
簡単だ。
体勢を崩されないように受け流せばいいだけの単純な話だ。
もちろん簡単にそんな事が出来れば誰も苦労などしない。
でもたった今、僕が閃いた方法なら体勢を崩されないはずだ。
ピンチのときにナイスなことが閃くなんて、流石は僕だぜ。ヒャッホウ!
だけど、その為には真っ正面からの攻撃が必要だ。
いくら僕が閃きの天才だったとしても肝心の技量はそうでもない。
単純な正面からの攻撃じゃなかったら合わせられないだろう。

辛抱強く耐えながらその時を待つしかない。
どれだけ耐えていただろうか、遂にその瞬間がきた。
中段から真っ直ぐに僕の胸に目掛けて拳が放たれた。
正面から高速で迫り来る拳をあえて体で受ける。その拳速を見極めて、同じ速さで身体を退くことで体勢を崩さずに衝撃を逃す。
かりんさんは攻撃を当てながらも殆ど当てた反動が無いせいで重心がほんの少し崩れた。
でもその程度は、かりんさんにとっては問題にならない。ほぼ同時に蹴りを放ってきた。
だけど、少しだけでも重心が崩れたお陰で威力が落ちている。逆に僕の体勢は万全だった。
顔面に向かって跳ね上がってくる蹴りに素早く手を添えると共に身体を跳ね上げて飛びつく。
「はぁあああっ!!!!」
僕はかりんさんの足を抱え込むと一気に体重をかけて地面に倒そうと身体を逸らした。
「うりゃあああーーあれ？」
地面に倒れる衝撃がこない？
「うふふ、わたくしに足関節をかけたことはお見事ですわ。ただ、つくしの体重が軽すぎましたわね」
蹴りを放った体勢のままかりんさんは笑っていた。
その真っ直ぐに伸びた片足に、僕をしがみ付かせても全く揺るがない強靭な足腰に僕は言葉を失う。
「えっと、かりんさんの足は引き締まってて綺麗だね」
えいっ、えいっと、力を込めてもビクともしなくて困ったので、とりあえず褒めてみた。
「あら、お褒めに預かり光栄ですわ」
意外と満更でもない感じのかりんさん。
「ところで、それ以上は力を込めてはいけませんわよ」
「えっ？　僕はまだ負けを認めてないよ」
「胸…痛むのでしょう」

実は僕の胸の骨は、衝撃を完全には受け流せなくて折れていた。
「うん、肋骨が1、2本って所かな？」
僕の言葉にかりんさんは呆れた顔になる。
「肋骨が5本ですわ。自分の怪我の状態ぐらい正確に把握しなさい」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「うぅ、朝っぱらから酷い目にあったよ」
神月財閥が誇る医療班の人達に治療をしてもらった僕は小学校に向かっていた。
「もう、このぐらいの怪我じゃ休ませてくれないし、少しずつ厳しくなっている気がするよ」
かりんさんも最初の頃は、僕が怪我をしたら小学校を休めるように手配してくれていたけど、今じゃ「男の子ですからこの程度、平気ですわよね」と、にっこり笑って小学校に行かされてしまう。
カムバック、優しいかりんさん…☆

「つくし君、どうしたの？元気がないみたいだけど」
トボトボと小学校に向かっていると声をかけられた。
声の先に目を向けると、そこには姉ちゃんの友達のケイ姉ちゃん（千歳ケイ）がいた。
「あ、ケイ姉ちゃん、おはよう」
「うん、おはよう。それで何かあったの？いつも元気なつくし君が、そんなお爺さんみたいな歩き方なんかして」
ケイ姉ちゃんは心配そうな顔になっている。
ケイ姉ちゃんは昔からの姉ちゃんの友達で、僕も小さな頃はよく遊んでもらっていた。今でも家に来たときはゲームの相手をしてくれる第二の姉ちゃんともいえる人だ。
そんなケイ姉ちゃんに心配をかけたくないから僕は明るく答える。
「ううん、大丈夫だよ。肋骨が折れてるだけだから心配しなくていいよ」
「えぇっ!?そんなの心配するに決まってるでしょ！」

僕の言葉にケイ姉ちゃんは安心するどころか逆に心配してしまった。
「本当に大丈夫だよ、格闘技の特訓でミスっちゃっただけだから」
「何言ってんのよ、格闘技の特訓って事は練習で怪我をしたのよね。試合とかで不可抗力で怪我したわけじゃないのよね？」
「いや、格闘技の特訓だからその中で怪我するのは不可抗力だよ」
「そんな訳ないでしょ！練習ていうのは試合で怪我をしない為にするのよ！その練習で怪我をするなんて本末転倒もいいところよ！」
慌てて弁明する僕だけど、ケイ姉ちゃんはまったく聞く耳を持ってくれない。
「どうせ、さくらが馬鹿力で殴ったりしたんでしょ！あの馬鹿は加減ってものを知らないんだから！」
どうやらケイ姉ちゃんは、姉ちゃんが僕に怪我をさせたと思っているみたいだ。
かりんさんに弟子入りした事は内緒にしてるから仕方ないけど、このままだと姉ちゃんにも僕が怪我をした事がバレて怪しまれるかもしれないな。
うん、仕方ないから僕の華麗なる話術で誤魔化すとしよう。
「実はこの怪我は特訓中の怪我じゃないんだ。本当の事を言うとね。ついさっきの事なんだけど、子猫が急に道路に飛び出したんだよ。そしたら大型トラックが猛スピードで走ってきて、僕は咄嗟に子猫を助けようと飛び出そうとしたら、僕よりも先に飛び出した人がいたんだ。その人は子猫を抱き上げて逃げようとしたけど、間に合わずに大型トラックにぶつかりそうになったんだ。でも、ぶつかると思った瞬間にその人を包み込むように光が現れて、辺りが眩しく輝いたと思ったら、その人は消えていたんだ。僕は光に驚いて転んだせいで肋骨を痛めたんだけど、こんな事を正直に話しても信じてもらえないと思ったから嘘を吐いたんだ。だから他の人には内緒にしてほしいんだ」
よしっ、今時よくある異世界転移物の召喚時に運悪く出くわしたことにすれば納得してくれるよね。流石は僕だ！
「ええ、よく分かったわ。そういう馬鹿みたいな言い訳をしなきゃい

けないくらい、さくらにボコボコにされちゃったのね。ほんとにあの馬鹿は何してんだか！」
誤魔化せなかった!?むしろ誤解が深まった!?
よし、こうなったら根本的なところを誤魔化そう。
「なーんちゃって、実は怪我ってのは冗談なんだ！」
「えいっ」
「ハグッ?!!??」
「ほら、痛がってる。やっぱり怪我してるよね。こんなに必死に誤魔化そうとするってことは、さくらに口止めをされているのね。大丈夫だよ、心配しなくても私がさくらをとっちめてあげるからね」
こ、この女、怪我してるとこに突きをくれやがった。
流石は長年の間、脳筋の姉ちゃんの親友をしてるだけあるぞ。
しかも誤解がさらに深まってしまった。
もう誤解を解くんじゃなくて口止めをすればいいや。
「ケイ姉ちゃん、これは僕たちの問題だから口出しはしないで欲しいんだ。僕にだって男としての見栄ってのがあるんだ。女の子に泣きつくような真似は出来ないよ」
「つくし君・・・そっか、つくし君は男だもんね。いつまでも私がしゃしゃり出たらダメだよね」
ケイ姉ちゃんは親戚のオバチャンがよくしてる微笑ましそうな顔になると僕の話に納得してくれた。
予想通りの展開だ。流石は僕だぜ!!
「ごめん。ケイ姉ちゃんがせっかく心配してくれたのに我儘を言ったりして」
「ううん、私こそゴメンね。つくし君は男なのに過保護すぎたよね」
ケイ姉ちゃんは謝りながら頭を撫でてくれる。
うーん。これは男扱いなのかなぁ？
疑問を感じなくもないけど、せっかく納得してくれたんだから余計は事は言わないでおこう。
「それじゃ、さくらには私から何も言わないでおくけど、もう怪我はしちゃダメだからね」

「分かった。約束はできないけど善処はするよ」
「もう、政治家みたいなこと言わないの」
ケイ姉ちゃんが苦笑したその時だった。嫌な気配を感じた僕は反射的にその場を飛び退いた。
次の瞬間、僕の目の前を木刀が通り過ぎていく。
「え、なに!?なにが起こっているの!?」
荒事に無縁のケイ姉ちゃんは、突然の事態に理解が追いつけずに混乱している。
だけど僕は飛び退いたときには、戦いに意識を切り替えていた。
「何者だよ。あんたは?」
油断なく構える僕の前には、いつの間にか木刀を持った学ランの男が立っていた。
「ククク、流石は俺の舎弟を倒しただけはあるな。不意打ちを躱されるとは思わなかったぞ」
男の顔には大きな傷があり、そのため隻眼となっていた。
その隻眼には隠しきれない喜びの色があった。
「僕があんたの舎弟を倒した?」
「つくし君、もしかしたらあの時の相手じゃないかしら!」
僕には男の言葉にピンとくるものはなかったけど、ケイ姉ちゃんの言葉で気付くことができた。
「あの時のアイツか!」
「うん、たぶんそうだと思うよ。それならこの人がいきなり攻撃をしてきた事も納得できるもの」
「なるほど、お前もあの件に関わっていたのか」
男はケイ姉ちゃんもあの件に関わっていたことが分かると、その殺気をケイ姉ちゃんにまで向けてきた。
殺気に慣れていないケイ姉ちゃんは思わず息を呑む。
「おい、あんたの狙いは僕なんだろう。女の子に殺気を向けるな!」
「おっと、悪かった。つい、な」
男はわざとらしく笑ってみせる。
「それで僕を挑発しているつもりか!」

「いや、そんな必要はないだろう？」
予想とは違い、男は意表を突かれたように顔になる。
「どういう意味だ？」
男は居住まいを正すと正々堂々と名乗りを上げる。
「代沢工業四天王が一人《狂える猛犬》吠児（コウジ）!!貴様にストリートファイトを申し込む!!」
なるほど、確かに挑発なんか必要ない。
ストリートファイターたる者、挑戦を受けて拒否する事などあり得ないのだから。
「ケイ姉ちゃん、少し下がっててくれる」
「つくし君!?君は怪我をしているのよ！ストリートファイトなんて無茶だよ！」
「ケイ姉ちゃんが僕を心配してくれる気持ちは嬉しいけど、ここで退いたら僕はストリートファイターじゃなくなる。それに…」
「それにって、何なの!?つくし君が無茶するぐらいならストリートファイトなんかやめようよ！」
ケイ姉ちゃんは必死な形相で僕を止めようとしてくれる。その優しい想いに僕の胸は温かくなった。
そして、だからこそ僕は退けない。
「それに…あいつはケイ姉ちゃんに殺気を向けた。僕は絶対にそれを許せない!!」
「つ、つくし君…」
「神月流格闘術拳士、つくし!!その申し込み受けた!!いざ尋常勝負っ!!」
言葉と同時に僕は間合いを詰める。
相手は木刀使いだ、刀の間合いで戦えば勝ち目はない。
「速い!?だが、その程度なら反応できるぞ！」
吠児は奇襲にも大して動じずに反撃に転じてくる。
続けざまに繰り出される剣撃に僕は近づくことが出来ない。
だが吠児も木刀を掴まれることを警戒してか、その踏み込みは浅く僕に決定打を与えるほどの威力はなかった。だけどこのままだと一

方的に体力を削られるだけだ。
あれ？　この状況って、今朝のかりんさんのときと同じだ。
「たしかあの時は攻撃は止めれたけど、反撃は通じなかったんだ」
吠児はかりんさんよりも更に身体が大きい。だぶん同じように関節を決めるのは難しいだろう。
その時だった。僕の脳裏に初陣の時の記憶が雷鳴のように蘇った。
初陣の相手は吠児すらも比較にならなかった程にデカかった。
当然、その膂力も比例して強かった。
それなのに僕の攻撃は通じた。
「何が違うんだ？」
かりんさんの時は、かりんさんの攻撃を止めてその隙をついて関節を決めようとした。
初陣の時は攻撃を躱してその勢いを利用して投げた。
「攻撃を止める事と躱す事…隙をつく事と勢いを利用する事……もしかしてっ!?」
こんなピンチのときにナイスなことが閃くなんて、流石は僕だぜ。ヒャッホウ！
「どうした吠児！そんな軟弱な剣で僕を倒せると思っているのか！」
「はっ！なにか企んでいるようだな。だがいいだろう。俺もチマチマと削るようなファイトは趣味じゃないからな。貴様の思惑に乗ってやろう。そう上で貴様を倒す!!」
吠児は今までの速さを重視した構えから一変させて大きく振りかぶった。
「本来の俺の剣は、二の太刀入らずの豪剣を極意をする。悪いが入院ぐらいは覚悟してもらうぞ」
吠児の闘気が大きく膨らんでいく。言葉通りに全力で来る気だ。
「こいっ、吠児!!」
「はぁっ!!!!!」
凄まじい速度で迫る豪剣に怯むことなく僕は豪剣に向かい進む。
豪剣が僕の頭を打ち砕く瞬間、更に一歩前に進む。片足を進める動きで身体を横に開くと同時に僕の目の前を豪剣が通り過ぎていく。

「今だっ!!」
豪剣が通り過ぎる〝前〟に、僕は吠児の両手を掴み懐に潜り込む。
「うおぉぉぉぉぉぉっ!!!!!」
僕は豪剣の勢いと自分自身の力を合わせて、吠児を思いっきり投げとばした。
「がはっ!?……ガクッ」
吠児が誇った通り、二の太刀入らずの豪剣の勢いは凄まじく、轟音と共にアスファルトに叩きつけられた吠児は一撃で気絶した。
〝ＹＯＵ　ＷＩＮ〟
「か、勝った…？」
「やったーっ!!つくし君の勝ちだよー!!」
「ケイ姉ちゃん…そっか、僕は勝ったんだ」
「そうだよ！つくし君の文句なしのＫＯ勝利だよ!!」
「う、うんっ、僕は勝ったんだ!!」
ケイ姉ちゃんの喜びの歓声で僕はやっと勝ったんだと理解できた。
本当にギリギリの勝利だったと思う。
土壇場であの閃きがなければ勝てなかっただろう。
僕はどうしてかりんさんに技が決まらなかったのかを考えた。そしてどうして初陣の相手には決まったのかを。
気付けば簡単だった。
かりんさんの時は、攻撃を受け〝止めた〟後に反撃をした。
初陣の時は、攻撃を〝躱しながら〟反撃をした。そう〝躱した〟後じゃない。
僕はずっと思い違いをしていたんだ。
初陣の時、僕は攻撃を躱して反撃をしたと思っていた。かりんさんの時は躱す余裕がなかったから受け止めて反撃をしようと思ってしまった。
攻撃を受けても躱しても、戦いの流れは一旦止まってしまう。
そうなれば体格も力も技術も劣る僕が勝てるわけがなかった。
だって、流れが止まってから再開するのなら条件は僕も相手も同じだからだ。

多少は体勢的に僕の方が有利だといっても、それ以上の差があれば関係ない。
でも僕は気付くことが出来た。
僕が初陣の相手を投げ飛ばせたのは、相手のパンチを躱しながらその勢いを利用出来たからだ。
戦いの流れを止めるのではなく、戦いの流れを利用する。
それが僕が勝てた理由だ。

「でも傍迷惑な人だったね」
「そうだね、ケイ姉ちゃん」
ケイ姉ちゃんは不機嫌そうに倒れている吠児を睨む。
「まったく、ゲーム大会で負けた弟の仕返しに本当に来るなんてね」
そう、あれは東京ゲーム大会の地区予選での事だった。
僕はまだ小学生だから保護者としてケイ姉ちゃんが付き添ってくれた。
本当の姉ちゃんの方は、ゲームに拒否反応を起こして騒ぐから迷惑になるからだ。
「おうおう、女連れでゲーム大会かよ。いいご身分だな」
そんなセリフと共に現れたのが吠児の弟だった。
まあこの後は、お約束通りに試合で当たったから、僕の華麗なコンボでパーフェクト勝利を飾ってやった。
「チクショウ!!ハメ技なんか使いやがって反則だぞ!!」
「へへーんだ!このハメ技はまだ大会の規定に載ってないから反則じゃないもんねー!」
「クソッタレ!!俺の兄ちゃんは凄え強いんだぞ!!言いつけてお前なんかボコボコにしてやるからなー!!」
「情けねー!小学生にもなって兄ちゃん助けてーって、言う奴なんか初めて見たぞー!」
「うう…」
「どうしたどうした、泣くのか?泣くのか?」
「う、うえーん!!」

「ほら泣いたー!!」
　そして、奴は泣きながら逃げていったが、本当に兄貴に泣きついて仕返しにくるなんて……バカな奴だ。
「いくら弟が可愛いからって、小学生のケンカにお兄さんが出てくるのは情けない話よね」
「本当だよ、例えば僕の姉ちゃんにそんな事を頼んだりしたら逆に僕が張り倒されるよ」
「あははは、さくらは正義感が強いからね」
　その時、吠児がピクリと動く。
「ちょ、ちょっと待て。お、俺はそんなアホな理由で来たんじゃ『止めだっ!!』ホゲッ!?……ガクッ」
「危なかった、まだ意識があったんだ。今攻撃されていたらケイ姉ちゃんを巻き込んでいたかも…ゴメンね、ケイ姉ちゃん。まだまだ僕は甘いみたいだ」
「ううん、大丈夫だよ。つくし君が守ってくれたから無事だったからね。ありがとうね」
「う、うん。これからはもっと気をつけるよ」

「ところで、つくし君」
「なに、ケイ姉ちゃん?」
　ケイ姉ちゃんが不自然に近付いてきた。
「さっき戦う前に言ってた『神月流格闘術拳士』ってのは何のことかしら?」
「しまったーっ!!!!」
　ニッコリと笑いながら、ケイ姉ちゃんは僕の腕を〝逃さないわよ〟と言わんばかりに組んできた。

　きっと今日は厄日なのだろう。
　かりんさんへの言い訳を考えながら僕はそう思った。

第十一話「兵士の想い」

かりんの攻撃が空を切った瞬間、死角からかりんの急所を正確に狙った反撃が放たれた。
身を沈めながらそれを躱したかりんは、勘を頼りに後ろ回し蹴りを放つ。
その蹴りは対戦相手に当たるが、そのあまりの手応えのなさに、かりんは咄嗟に身をよじってその場から飛び退く。
「流石だな。反応がコンマ一秒遅れていれば膝が砕けていたぞ」
対戦相手から自分を賞賛する声が発せられるが、かりんは不満気に返す。
「手加減をしている貴女に褒められても嬉しくありませんわよ。キャミィ」
その言葉に対戦相手――キャミィは少し困った顔になる。
「そう言われても困る。私は格闘家じゃないんだ。本来は兵士なんだぞ」
かりんの言葉通り彼女との試合でキャミィは全力は出していなかったが、それは仕方ない事だろう。
キャミィが習得しているのは道場で習うような格闘技とは異なり、戦場での命のやり取りを前提とした戦場格闘技だ。
その全力を振るおうと思えば当然のように武器を使用する。
それも刀剣類だけではなく、当たり前のように銃火器を併用するスタイルだった。
もちろん素手での格闘でも、かりんと互角以上のレベルを誇っていたが、武器を持たない戦いでは全力とは程遠いレベルにまで落ちてしまう。
「ですから武器をお持ちになっても構わないと言っているのです」
かりんの不機嫌そうな言葉にキャミィは本気で困り顔になる。
「それは出来ない。私はかりんを殺したくない」
その言葉は聞きようによってはかりんを下に見る発言ではあったが、かりんはキャミィの兵士としての実力を知っていた。

「確かに〝何でも有り〟の戦いだと今のわたくしではキャミィに勝てないでしょう。ですが、だからこそ〝意味〟があるのですわ」
傲岸不遜が服を着て歩いているような彼女が〝勝てない〟と素直に認めるほどにキャミィの兵士としての能力は高かった。
今はまだ年齢が若く身体が小さいため、素手での格闘の場合だと体力が上の相手にパワー負けする場面があったが、武器を使用できるのならそのハンデはなくなる。
シャドルーによって肉体は遺伝子レベルの調整を受け、心も精神操作によって改造されたキャミィは死と隣り合わせの過酷な訓練を経た結果、完全武装した一個小隊を軽く屠れる程の戦闘力を有していた。
「かりんが言う〝何でも有り〟の戦いを、かりんが覚える必要など無いだろう？　いや、むしろ覚えてはいけないものだ」
光の下で生きるかりんが人殺しの技など覚える必要はないとキャミィは断じる。
「必要ならば闇の部分は私が引き受けよう。それぐらいしか私には返せるものが無いからな」
キャミィがシャドルーという強大な力を持つ犯罪組織から抜け出すのはかりんの――神月財閥の力を持ってしても簡単なものでは無かった。
その無理を何の見返りも要求せずに通してくれた事実に、感謝などという言葉では表せない程の恩を感じたキャミィは、再び血に塗(まみ)れた世界に戻る事すら厭わなかった。
「キャミィ、貴女…」
もしもこの時、キャミィが悲壮な表情を浮かべていたのなら、かりんはこの様な発言など許さなかっただろう。
だが、キャミィが浮かべていたのは強い想い。大事な人を護りたいという決意の表情だった。
「たとえその結果、再びこの手が血に塗れようとも後悔などない。むしろ私はその事を誇るだろう」
決して後ろ向きではない。真っ直ぐと前を向いて胸を張る姿に、か

りんは胸の奥に何かを感じるが上手く言葉に出来なかった。
何か言わなければ、早く言わなければ、この優しい子は再び光の差さない場所に行ってしまう。それが分かっていながらもかりんには言葉が見つからない。
どれほど強いといっても、かりんも未だ中学生の子供に過ぎなかった。
キャミィの過酷な過去を知っているからこそ、彼女の選択の重さを知っているからこそ、かりんは発すべき言葉を見つけられなかった。
「ていっ」
そんな時だった。
キャミィの頭に軽くチョップをかます空気を読まない馬鹿がいた。
「痛いぞ、いきなり何をするんだ」
本当は痛くはなかったけど、頭をさすりながらキャミィは苦情を言う。
もちろん怒ってなどいない。
むしろ構ってもらえて嬉しかったりした。
「キャミィが物騒な話をしているからだよ。血に塗れるとか怖いこと言わないでよ」
「いや、私が出来るのは戦うことだけだ。そして戦うなら血に塗れることを恐れはしない。それがお前達を護る為なら私は喜んで血塗れになって戦おう」
それは引き止めたくなる凄絶な決意だったが、キャミィの強い想いを込めた言葉と、優しさをたたえた微笑に、やはりかりんは何も言えなくなる。
「ていっ、ていっ、ていっ」
「いた!?痛い!?本当に痛いぞ!?」
先ほどより強い力での連続チョップを受けるキャミィ。
今度は本当に痛いが、やっぱり構ってもらえて嬉しかったりする。
「だーかーらー!そういう危ない事は大人に任せたらいいんだよ!キャミィはまだまだ子供なんだから危ない事に首を突っ込もうとしたらダメだよ!!」

「えっ!?」
真理であった。
キャミィがかりんと同じ年齢なのは遺伝子検査で判明している。
つまりは中学2年生なのだ。
将来の職業として兵士を選びたい（つくしは反対する気だけど）という話だけなら兎も角、今は大人に守られながら学業に専念する年齢なのだ。
つくしに言わせれば、かりんとキャミィが話し合っていた内容は〝こいつらは何を言ってんだ、厨二病なのか?〟というレベルである。
「それにキャミィは来週から中学に編入するのに勉強しなくて大丈夫なの?」
「何の話をしている?」
「キャミィが同じ中学にですか?」
精神操作の影響が残るキャミィの正常化を目標に行われているキャミィ育成計画（責任者：柴崎）の一環で、キャミィはかりんが通う中学校に編入する事が実は決まっていた。
もちろんキャミィは柴崎から聞かされていたが、日常的な事に関しては何故かその大半が頭から抜け落ちてしまう為、キャミィは覚えていなかった。
かりんの方は柴崎に全てを任せており、柴崎からのキャミィに関する申請書は禄に見ていなかった。
つまりかりんはハンコを押すだけの簡単なお仕事に専念していたのだ。
つくしはというと、柴崎と二人でキャミィ育成計画の中心を（いつの間にか）担うメンバーになっていた。
これは柴崎の予想以上にキャミィの攻撃性が高く、迂闊に近付くだけで彼女の無意識の迎撃反応で致命傷を受けかねない事が判明した事に理由があった。
それはキャミィの迎撃反応によって、育成計画のメンバーが傷付いた事が原因になり育成計画自体が頓挫しかけていた頃の出来事だった。

かりんに連れられて神月財閥の訓練施設を訪れたつくしが偶然見かけたキャミィをビックリさせようと後ろから突然声をかけたのだ。
周囲の人間はキャミィの迎撃反応でつくしが攻撃を受けると思い息を飲んだが、予想に反しキャミィは普通に驚いた後、つくしとの再会を喜んでいた。
その現場に立ち会っていた柴崎はピカーンと閃いた。
キャミィの迎撃反応はキャミィが完全に信頼している人間には発動しないのだ。
この事に気付いた柴崎がアニマルセラピーならぬ〝つくしセラピー〟を実施した事は正しい選択だったのだろう。
キャミィは急速に精神的に安定していった。
それからは柴崎によって、つくしもキャミィ育成計画に参加させられるようになった。もちろんつくしは喜んで参加していた。
「キャミィが通う中学には僕の姉ちゃんも通ってるから仲良くしてやってよ」
「そうだな。つくしの姉なら私とも気が合うだろうしな」
キャミィは勉強をするのは好きではなかったが、つくしとの接点が増えそうな予感に心が弾んでいた。
「そうだ、何だったら今から僕ん家に来ない？　今日なら姉ちゃんも居てる筈だから紹介するよ」
「ああ、それはいいな。つくしの家には一度行ってみたいと思っていたから私も嬉しい」
「一度と言わずにこれから何度でも遊びに来てよ」
「ふふ、そんな事を言ったら入り浸りになってしまうぞ」
楽しげに話す二人は普通の仲の良い子供達にしか見えなかった。
先程までの強い覚悟を秘めた一人の兵士など何処にも居なくなっていた。
そんな二人の様子に見入っていたかりんはポツリと呟く。
「〝つくしセラピー〟凄まじい効果ですわ」

第十二話「つくしの選択」

さくらのクラスに転校生がやってくる。
朝からその話題で騒々しい教室で、さくらは一人考え込んでいた。
それは昨日のことだ。
それまで女の子に興味など示したことのなかったさくらの弟が、突然家にガールフレンドを連れてきたのだ。
それもわざわざ自分に紹介するために連れて来たらしい。
さくらは自分でも姉弟仲は良いと思っている。
それに同じストリートファイターを目指す仲間でもあるし、その自分に初めてのガールフレンドを紹介したいと思うのも不思議ではないだろう。
でも相手の女の子が明らかにつくしより年上だった。おそらくは姉である自分と同じぐらいだとさくらは思っている。
そして金髪碧眼の美少女だが、頬に傷のある鋭い目つきの持ち主だ。
これで心配しない姉などいないだろう。
「さくら、どうしたのよ、元気ないみたいだけど?」
さくらが顔を上げるとそこには、親友のケイが心配そうな顔で自分の様子を伺う姿があった。
「なんだ、ケイか。なんでもな…」
言葉の途中でさくらは、最近気になっていたもう一つの件を思い出す。
さくらとケイは、幼い頃からの親友だった。その為、自然とさくらの弟とも仲良くなった。
ただ、やはり男女の違いと、歳の差があったため最近は疎遠になっていた。
最近ではつくしがゲーム大会に参加する時に、自分の都合が悪かったため引率を頼んだのみで、他の接点は無かった〝はず〟だった。
「この間、つくしと喫茶店にいたよね」
それはケイが騒動に巻き込まれた時に知る事になった、つくしの師

匠の件が切っ掛けだった。
あの騒動の日、ケイはつくしから事情を白状させると、彼が色々と危険な目に遭っている事を知ることになる。
つくし本人の危機感は弱く、つくしの事を弟のように思っていたケイは、能天気に笑いながら説明する彼を放って置けなくなる。
それ以降、頻繁につくしを呼び出しては様子を伺うようになった。
そうなると、ケイとつくしは元々仲が良かったため、ついでに遊ぶようにもなる。
ただ、師匠の件についてはさくらに内緒にする事を約束したため、ケイは内心では焦りながらもシレッと答える。
「なんだ、見てたんなら声を掛けてくれたら良かったのに。この間、偶然つくし君と会ったからお茶してたんだ」
アハハと、笑いながら答えるケイの様子におかしい所はないようにさくらには見えた。
だけどさくらは、自分の男女に関する眼力など微塵も信用していなかった。
さくらは思い切って、直接的な言葉でケイに確認することにした。
「ケイはつくしにおっぱいを触られても平気かな？」
ぶほぉおおおっ!!と、まるで漫画のように吹き出すケイに、さくらは確信を深めるのだった。
「やっぱり、そうなんだ」
「ゲホゲホッ、ちょ、ちょっと待ちなさい！　何を勝手に納得したのかを聞かせなさい！」
ケイは訳の分からない事を言い出した親友を問い正すが、親友は曖昧な笑みを浮かべるだけだった。
（昔なら弟同然のつくしにおっぱいを触られても平気だったケイが、こんなに取り乱すなんて、やっぱりそういう事なんだ）
小学校〝低学年〟の頃を思い出しながらさくらは、更なる心配事を思い出す。
それはさくら達が海外旅行から戻って来た頃の話だった。
旅行中につくしと仲良くなったかりんが、さくらと遊びに行く時

に、つくしを連れてきても構わないと言い出したのが始まりだった。
さくら達は、姉弟でも遊びに行くタイプだったため、深く考えずにつくしを誘うようになった。
そんなある日、さくらが急用で約束をキャンセルしようとした時の事だ。かりんはつくしと二人で遊びに行くと言い出した。
その時のさくらは「そっか、じゃあ二人で楽しんで来てね！」と、約束をキャンセルする心苦しさから解放されたため、能天気に答えただけだった。
しかし問題はそこから始まった。
それ以来、かりんがつくしと二人だけで会うようになったのだ。
かりんは、つくしと二人でも楽しいからと簡単に言うが、あの〝かりん〟が言ったのだ。
その言葉に、どれ程の重みが込められているのか、能天気なさくらでも察する事は容易だった。
頬に傷のある金髪碧眼の美少女で、一筋縄ではいかない雰囲気を持つ年上の女の子。
姉の親友で、本人も幼い頃から姉のように慕っていた年上の女の子。
姉の友達で、世界的財閥の次期総帥で途轍もなく気の強い年上の女の子。
弟は、紛れもない年上好きであり、難易度の高い女の子ばかりだと、さくらは頭を抱えてしまう。
しかもそれなりに脈が有りそうなのが、我が弟ながら恐ろしい。
「よし、今度火引さんに相談してみよう」
さくらは数少ない男性の知り合いに相談してみる事にした。
しかしその事が、とんでもない騒動を巻き起こす事になろうとは、この時のさくらには想像もつかない事だった。

＊

今日は久しぶりに行われる、かりんとつくしの特訓の日だった。

この2週間程の間は二人の都合が合わなかったため、特訓が中止になる事が続いていた。
「ふふ、つくしも自分のスタイルを掴み始めたようですわね」
久しぶりにみる弟子は、現時点での弱点である攻撃力の低さを補うために、相手の力を利用する合気道などの技術を取り入れ始めていた。
その事をかりんは嬉しく思う。
何故ならそれは、かりんが考えていた彼に必要な技術と同じものだったからだ。
弟子が自分自身で己の弱点に気付き、その克服が出来るようにと、あえて答えを口にするのを我慢していたかりんは、期待通りの成果をみせてくれた事に上機嫌になる。
「うん、でも今の体格に合ったスタイルだから、これから成長して筋骨隆々の大男になったら見直す必要があるけどね」
ニコニコとしていたかりんの笑顔が僅かに引きつる。
「つ、つくしが筋骨隆々とした大男に…ですか？」
恐る恐るといった感じで、かりんはつくしに確認する。
「うん、僕の理想はザンギエフさんだからね！」
元気一杯に答えるつくしの姿に、かりんは眩暈をおぼえた。
日本人として平均的な体格のつくしが、ザンギエフを目標とする――無謀としか思えなかった。
「あの、えと、そのね、つくしとザンギエフ殿ではですね、なんと言いますか、人種も違いますから、あのですね…」
他人に気を使わない事に関しては右に出る者はいないグランプリを開催すれば、ぶっち切りで学年一位になるだろう彼女が、珍しく気を使って言葉を濁していた。
「かりんさん、別に僕はザンギエフさんと同じぐらい大きくなれるなんて思っていないよ」
かりんが気を使っている事に気付いたつくしは、苦笑交じりに言う。
「そうですわよね！　日本人のつくしがザンギエフ殿のような『身長

は１９０センチぐらいで我慢しようと思っているんだ』はい？」
つくしの言葉にホッとしたかりんだったが、すぐさまカウンターがくる。
かりんの顔が再び引きつっていく。
「実は内緒にしていたけど、あれから一リットルの牛乳を毎日欠かさず飲むようにしているんだ！」
つくしは誇らしげに胸を張ってかりんに告げる。その瞳は、かりんをジッと見つめたままだ。かりんには何かを期待しているように見えた。
（柴崎、つくしがドヤ顔でわたくしを見つめたまま動きませんわ）
（つくし様はきっと、師匠であるお嬢様に隠れた努力を褒めて欲しいのだと推察されます）
（柴崎、つくしが牛乳を飲み続けて１９０センチになれる可能性があると思いますか？）
（以前にキャミィ様の遺伝子検査を行ったついでに、つくし様の遺伝子検査も行いました）
（それで結果は如何でしたの？）
（あくまで遺伝子検査上での話ですが、つくし様が日本人の平均を大きく越える可能性は０パーセントです）
（…柴崎、後は任せましたよ）
（お嬢様っ!?　逃げないで下さいっ!!）
意思の疎通をアイコンタクトのみで行う主従に気付かないまま、つくしはのんびり考えていた。
〝煮干しも毎日食べてる事を言ってみようかな〟

＊

つくしは衝撃的な事実をかりんに告げられた。
なんと、神月流格闘術の真髄を学ぶ為には、大き過ぎる身体では不都合があるというのだ。
確かに神月流格闘術は、日本人の為の格闘術ゆえ、日本人として平

均的な体格でなければ習得が難しくても不思議ではないだろう。
かりんの咄嗟の機転の効いた言葉は、予想以上の説得力を持って、つくしの心に届いた。
それゆえにつくしは本気で考えた。
〝今が僕の人生の岐路かもしれない〟
つくしは思い出す。
かりんとの厳しくも楽しい日々を。
つくしの心に蘇る。
あの日のたくましい背中を。
つくしは、かりんに目を向ける。
自分に優しくしてくれる、年上で強い女性。このままだとずっとこの人に守られたままだろう。
僕はこの人を守れるほどに強くなりたい。
その為には同じ道を歩んでは不可能だろう。
僕は決めた!!
「かりんさん！　僕は決めたよ、僕はっ」
「そういえば、来月に神月財閥で開催する格闘大会にケン・マスターズが参加するのですが、わたくしの弟子であるつくしには、特等席の準備をしてありますわ。それと私からお願いすれば、ケン・マスターズの個人レッスンも受けれますわよ」
かりんさんはにっこりと笑いながら僕を見つめている。
僕はかりんさんの目を真っ直ぐに見つめ返すと宣言した。
「僕は神月流格闘術を極める為に牛乳と煮干しをやめます!!」

第十三話「男の意地」

「昇竜拳ならマスター出来るかも？」
ケン・マスターズの指導を受けれると聞いて、最初に思ったのはこの事だった。
遠距離攻撃の波動拳は確かに魅力的だけど、残念ながら僕では気質的に向いていない。
だけど、ケン・マスターズの代名詞ともいえる昇竜拳なら可能じゃないだろうか？
「そうですわね、確かに昇竜拳ならつくしにも可能性はありますわ」
かりんさんに尋ねてみたら肯定してもらえた。
「それなら僕は昇竜拳を「ですが！」かりんさん？」
かりんさんの肯定に意気込む僕をかりんさんは強引に止める。
「ですが、昇竜拳は一見、只の強力なアッパーカットに見えますが、その内実は途轍もない量の気を込めた一撃必殺の剛の拳ですわ」
「剛の拳……つまり、柔の拳を学んでいる僕には不向きの技ってことだね」
「ええ、残念ですがその通りですわ」
かりんさんは眉を下げて本当に残念そうにしている。
僕が昇竜拳を身につけたら確実な決め技になるだろう。だからこそ僕の師匠であるかりんさんも惜しく思ってくれる。
僕がかりんさんから指導を受けている神月流格闘術は、様々な格闘術からも技術を受け入れているから昇竜拳を受け入れる下地もある。
だけど問題は神月流格闘術ではなく、僕の方にあった。
僕の身体は決して大きくはない。もちろんチビだというわけじゃないけど、あくまでも標準体型だ。
対して格闘界では化け物のような巨漢は珍しくなく、そんな巨漢を相手に真正面から挑むのは自殺行為だ。
その為、僕は合気道を中心とした相手の力を利用する技術を磨いている。
この事はかりんさんも賛成してくれていて、神月流格闘術の指導も

柔の技法をメインとしている。
つまり、僕の戦闘スタイルは柔の拳だから、そこに剛の拳の昇竜拳を組み込むと、僕の戦闘スタイルを崩すことになってしまうんだ。
まあ、実際に想像すれば分かりやすいと思う。
僕の得意とする投げ技や関節技を使っている最中に全身の気を集中して爆発させる打撃技の昇竜拳をどうやって組み込むんだって話だ。
……いや、待てよ。
かりんさんも僕と同じで標準体型だよね。
そして、かりんさんは柔の拳も使えるけど、剛の拳の方をメインに使っているよね。
つまり僕も柔と剛、両方の拳を身につければいいだけの話じゃないかな？
その時々に応じて、柔と剛の拳を使い分ければいいんだよ。
うんうん、考えてみれば神月流格闘術の極意は人のリミッターを外して、人外の力を使っての闘法にある。
むしろ、柔の拳よりも剛の拳の方が適正があるのかも！
「つくし、貴方が考えている事は大体分かりますが、それは無謀ですわ。つくしとわたくしでは基礎となる身体の造りがそもそも違いすぎますもの」
むむ!?
それはどういう意味なのかな？
今現在の話なら確かに修行不足の僕よりもかりんさんの方が体力はあるだろうけど、僕だって修行をしているんだ。将来は女性のかりんさんよりも体力的には上回れるはずだ。
「あの、つくし。貴方が考えている事は大体分かりますが、わたくしは女ではあるのですが、外見で分かる通り、わたくしには狩猟民族の西洋の血が混ざっています。つまり、農耕民族の日本人であるつくしよりも筋肉などの質そのものが……その、つくしよりも恵まれているのですわ」
かりんさんは非常に言いづらそうにしながらもハッキリと口にし

た。
僕よりも筋力が上だと。
「それはいくら何でも言い過ぎだよ、かりんさん。総合的な体力なら兎も角として、気の力を抜きにした単純な筋力なら今だって僕の方が強いと思うよ」
僕は姉ちゃんにだって、腕相撲なら勝てるんだよ。
その姉ちゃんと同い年のかりんさんになら勝てる自信がある。
僕はかりんさんの二の腕に目を向ける。その腕は引き締まっていて瞬発力はありそうだけど、パワーがあるようには見えない。
うん、負ける気なんか全然しないよ。僕にだって男としての自信があるからね、かりんさんと腕相撲勝負をしたっていいよ。
「そ、そうですわね。さくらさんに勝てるのでしたら、もしかしたらわたくしにも勝てる……希望があるのかも……あればいいなあ……あると信じたいなあ……わたくしの弟子だもの……そ、そうですわ！
指相撲にしませんこと？」
そんなことを言い出すかりんさんの顔には、僕を気遣う気持ちがありありと浮かんでいた。
「うがーっ!!　そこまで言われたら僕だって男だからね!!　絶対に負けてなんかやらないよ!!」
こうして、かりんさんと僕の腕相撲勝負の幕は切って落とされた。

＊＊＊

僕の提案で、腕相撲勝負には姉ちゃんとキャミィも呼ぶことになった。
「ふっふっふっ、僕の勇姿を皆んなに見せてやるぞ！」
「勇姿って、女の子相手に腕相撲に勝つのって自慢のなるのかなあ？」
うるさい。姉ちゃん黙れ。
「ふふ、流石はつくしだ。自信のほどが身体中から溢れているな」
うんうん、やっぱりキャミィは分かっているよね。僕が年上とはいえ、女の子相手に負けるわけがないよ。

僕がキャミィの言葉に頷いていると、かりんさんが気が進まなそうな顔で現れた。
「かりんさん、大丈夫なの？　元気がないよ」
「さくらさん……（この勝負、止めて下さいませんか？）」
「かりんさん……（やっぱり、つくしに勝ち目はないの？）」
「さくらさん……（百回すれば百回ともわたくしの勝ちですわ）」
「かりんさん……（あたしが止めてもやめそうにないし…わざと負けるわけにはいかないのかな？　腕相撲勝負で負けたらつくしの奴、もの凄く落ち込みそうだよ）」
「さくらさん……（わたくしも出来ればそうして差し上げたいのですが……わざと負けるのってどうすればいいのかしら？）」
「かりんさん……（かりんさん、そういう演技下手そうだもんね。うーん、もしもわざと負けたのがバレたら余計につくしの奴、落ち込みそうだなあ）」
「さくらさん……（うう、一体どうすればいいのかしら？　そ、そうだわ！　わたくし今から劇団に入団して演技の勉強をしますわ！　わたくしが演技をマスターするまでの間、さくらさんにこの場はお任せしますね！）」
「かりんさん……（現実逃避は止めようよ。それのしても、えへへ）」
「さくらさん……（何をお笑いになっているのかしら？）」
「かりんさん……（うん、かりんさんがつくしの気持ちを本気で気にかけてくれてる事が嬉しくてさ）」
「さくらさん……（それは当然ですわ。つくしはわたくしの可愛いデ……ではなくて、そ、そう、大事な友人ですもの）」
「かりんさん……（えっ、あたしの弟だからとかじゃなくて、かりんさん自身の大事な友人扱いなんだ……ムムム、まさかの脈アリなのかな？）」
「さくらさん……（どうされたのかしら？　さくらさんには似合わない難しい顔をされたりして）」
「かりんさん……（似合わないは余計だよ！）」

「つくし、あの二人はどうしてずっと見つめ合いながら名前を呼びあっているんだ？」
「さあ？　親友同士の目と目で語り合うってやつかな？」
よく分からないけど、姉ちゃんとかりんさんは盛り上がっているみたいだから、しばらくソッとしておこうかな。
「そうか。私には理解不能なコミュニケーション技術があるのだな」
「そう難しく考えなくても大丈夫だよ。ほら、団体競技でのアイコンタクトみたいなものだと思えば簡単だろ」
僕も時々、柴崎さんとは男同士の熱い語り合いを目でしたりするから、キャミィも慣れれば出来るだろう。
「ああ、つくしが柴崎と責任の押し付け合いとかをしている時のあれだな」
それなら理解できると、僕としては非常に不本意な納得のされ方をされた。
「つくしも出来るのなら、私もできるか試してみよう。協力してくれ、つくし」
「うん、いいよ」
キャミィの頼みを受けて、僕は彼女と視線を合わせた。
「ジーーーーーーーー」
キャミィの青い瞳が僕を見つめている。
こうして見ていると、キャミィの瞳はとても澄んでいて綺麗だという事がよく分かる。
瞳は心の窓という言葉が表す通り、キャミィの純粋な心が伝わってくるようだ。
キャミィも僕の瞳を見て、同じ事を考えているのかな？　つくしの黒い瞳は綺麗だな。なんてね。
「つくし、目が充血して血走っているが寝不足なのか？」
……そういえば昨日は夜遅くまでゲームをしたんだっけ。
「ダメだぞ、つくし。子供は早く寝るべきだ」
「キャミィに子供扱いされるほど年は離れていないよね!?」
「そうなのか？　私はつくしの姉と同じ年だぞ」

「姉ちゃんと僕は姉弟だから同じ子供だよ！　つまり、キャミィも僕と同じ子供なの！　だから大人ぶった小言はしないでよ！」
「ふふ、子供扱いをされて怒るのは子供の証拠らしいぞ」
キャミィが微笑ましそうな笑みを浮かべながら僕を見つめている。
くそう、キャミィに変な事を教えているのは誰だ!?
まったく、どうやらキャミィにも僕の男としての凄さを教えてあげる必要がありそうだな。
「キャミィ、僕と腕相撲勝負をしないか？」
「腕相撲勝負？　かりんとやる前に私とやりたいのか？　つくしがやりたいのなら私は構わないぞ」
キャミィは首を傾げながらも準備しておいた腕相撲用のテーブルに移動すると右手を構えた。
ククク、かりんさんの前にキャミィを倒してやる。
そうすれば、キャミィも僕を子供扱いするのを止めるはずだ。
「キャミィ！　手加減無用だぞ！」
「わかった。全力でいかせてもらう」
キャミィの手を握っても特に強さは伝わってこない。柔らくて小さい女の子らしい手だ。
これじゃあ、男の僕が本気を出すのが大人気ないと思われるかもだけど、今回だけは特別だ。
キャミィ、そしてかりんさんに男の強さを教える為だからね。
「いくぞ、キャミィ!!　レディーゴー!!」
僕の合図で勝負の火蓋は切って落とされた。
「さくらさ……えっ!?　どうしてお二人が勝負をされているのかしら!?」
「かりんさ……ちょっ!?　キャミィ、本気を出しちゃ『バァァァァンッ!!』遅かったか…」
合図を告げた次の瞬間、僕の右手は爆発したような衝撃を受けた。
「す、すまない、つくし。ち、力加減を間違えてしまった……」
キャミィが真っ青な顔になっている。
「柴崎っ!!　至急、医療班を回しなさい!!」

かりんさんが珍しく大慌てで叫んでいる。
「まあ、つくしの自業自得みたいなもんだから、仕方ないよね」
姉ちゃんが心配そうな顔をしながらも肩を竦めていた。
僕は自分の右手を見る。
とても硬いはずのテーブルに深々とめり込んでいた。
その事を正確に認識した瞬間、僕の右手から途轍もない痛みが伝わってきた。
「グウッ!?」
痛みのあまり身体が震え出す。そして、顔中から脂汗が流れる。
「グッ、ググッ…」
本当は泣き叫びたい。
だけど、僕は歯を食いしばって痛みに耐える。
身体が勝手にのたうち回りそうになる。
だけど、僕は下腹に力を込めて踏み止まる。
そして、僕は口を開く。
「あ、あはは…や、やっぱり、女の…子…あ、相手に、男の…ぼ…僕が……ほ、ほん…きは、だせな、いや。きょ、うは……キャ、キャミィに…花を持たせて……あ、あげる…よ」
よし、最後まで言い切った…ぞ。
「「つくしっ!?」」

この日、僕の記憶はここで途絶えた。